

学内広報

for communication across the UT



特集：東京大学の国際化に関する意見と要望調査
(留学生・外国人学生・外国人教員・外国人研究者向け)

How do international academic staff, researchers, and students feel at Todai?
— Flash report of the online survey on the internationalization of Todai —

2008.10.20

No. 1378

東京大学の国際化に関する意見と要望調査

— 教職員・学生一人一人の声を反映させた国際化推進長期構想の立案に向けて —

Ⅲ. 留学生・外国人学生向け、Ⅳ. 外国人教員・外国人研究者向け

調査結果ダイジェスト



国際担当理事・副学長
浅島誠

【回答者数】

- ・留学生：313名
- ・外国人学生：28名
- ・外国人教員：93名
- ・外国人研究者：125名

国際連携本部国際企画部は2009年度に東京大学の「国際化推進長期構想」を策定するために、昨年度後半から東京大学の国際化に関する学内調査を実施しており、今回はその調査の集大成として、東京大学の国際化の方向性や重点施策について教職員や学生の皆さま一人一人にご意見・ご要望を伺いました。

教員・職員の意見と要望を掲載した学内広報1376号と、学生の意見と要望を掲載した学内広報1377号に続いてご紹介するのは、Ⅲ. 留学生および外国人学生を対象として実施した調査結果と、Ⅳ. 外国出身の教員および研究者の調査結果ダイジェストです。この調査には、東京大学の外国籍の学生の12%にあたる、341名の留学生や外国人学生が回答を寄せてくれました。また、93名の外国出身の教員および125名の研究者からご回答をいただきました。これは常勤教員の5割強、特定有期雇用の教員の15%にあたります。ご回答いただいた皆さま、そして、回答を呼びかけてくれた教職員などの皆さまにこの場を借りて、篤く御礼を申し上げます。なお、本調査結果の詳細は、国際連携本部ホームページに掲載されておりますので、そちらもご参照ください。

調査結果は年末に「東京大学国際化白書（仮称）」としてとりまとめられ、2009年度に策定される「東京大学国際化推進長期構想」の参考に供される予定です。来年度策定する「東京大学国際化推進長期構想」では、皆さんの意見を積極的に取り入れていく所存です。その節は何卒ご協力いただきたく、どうぞよろしくお願い申し上げます。

外国人教員・研究者の満足度

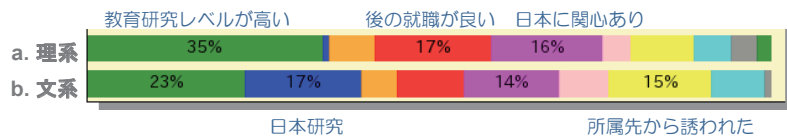
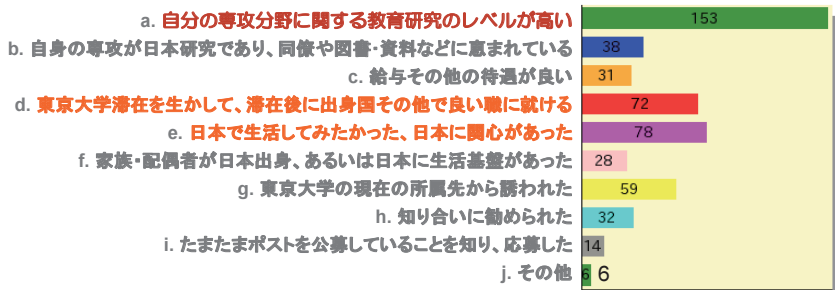
一般的に、東京大学の教育研究レベルに惹かれて、着任・滞在する方が多いようです。

一方、理系と文系とでは来日理由の重点が異なるようです。理系はその後のキャリア形成の可能性への期待や日本への関心から着任するのに対して、文系は専門が日本研究であったり、所属先から誘われて着任するようです。

東京大学における滞在については、概ね満足（83%）ですが、理系の方が文系より満足度が高いようです。また、短期滞在の研究者の方が正規に雇用されている教員より満足度が高いようです。

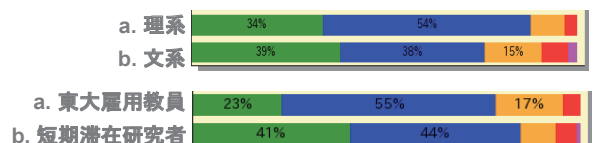
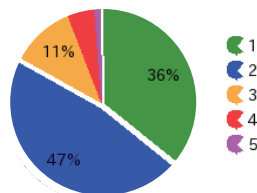
着任・滞在理由

●あなたが東京大学への着任（滞在）を決意した理由は何ですか？（複数回答可）



満足度

●東京大学の水準や在籍・滞在の条件や環境について5段階で評価してください。1)非常に満足、2)満足、3)どちらともいえない、4)あまり満足していない、5)非常に不満。



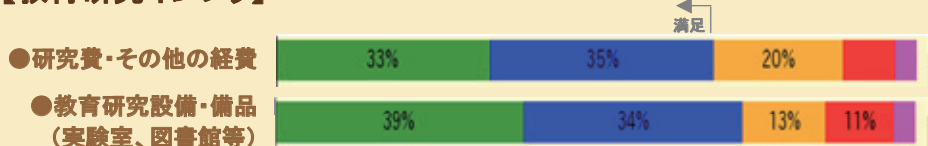
【研究水準、質】



教員や研究水準には満足。でも、もう少し、人との交流や刺激が欲しい。



【教育研究インフラ】

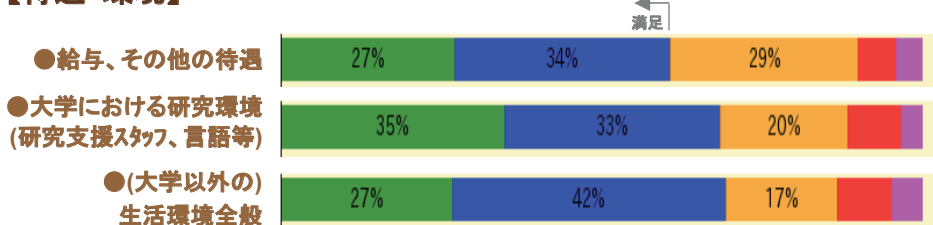


教育研究インフラについては総じて、理系の方が文系より満足度が高いようです。

●教育研究設備・備品 (実験室、図書館等)



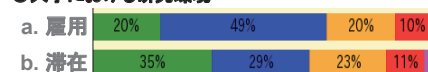
【待遇・環境】



待遇・環境については不満とまでは言わないまでも、満足度は高くないようです。

特に、短期滞在の研究者に比べて、正規雇用の教員の満足度が低くなる傾向にあります。

●大学における研究環境



★東京大学の研究水準には概ね満足しながらも、

人との交流や研究・生活環境面ではストレスを感じることも多いように見える

外国出身の教員・研究者に良かった点、悪かった点について、ご意見を頂きました。

良かった

○Very good experience, I was astonished that there were **so many researchers dealing with topics from my field of research!**

○I had a good experience in staying at Todai, because my **host professor is very helpful and efficient.** Moreover, the research facilities (office, library) are just perfect. Finally, the research level is one of the best in the world.

○I had a very good experience staying at Todai, **many new perspectives on East Asia, excellent colleagues, rich and stimulating intellectual environment with excellent and friendly support** and very information rich symposia with international participation of leading colleagues in the field.

悪かった

○I had a bad experience in staying at Todai, because **excessive working time.**

○I have had some bad experience at Todai due to feeling **very lonely and unsupported** for the first 2 to 3 months and people's lack of awareness of the language difficulties.

改善提案

○On the whole I had **very little interaction** with the other faculty and graduate students here. (中略) It would be nice if the university created more opportunities for this type of interaction, such as forums, etc. The disciplinary and departmental boundaries are very strong and it makes it very difficult to meet people in other departments.

○東京大学滞在を決めた決め手となったのは図書館の質の高さであったため、その意味では非常に満足した実りの多い滞在でした。しかし、**資料の各学部図書館への分散、そして学部図書館ごとの開館時間や閲覧規定の違いからくる不便さは想像していた以上のもの**でした。

○とても良い研究環境で、研究することができて本当に良かったと思います。**事務的な手続きが多く、無駄な手続きを省くか、それをサポートできるスタッフがいれば宜しいか**と思いました。

東大以外の大学に行けば良かったか？ (研究者の場合)

【外国人研究者が、東大以外で行けば良かったと思う大学・国】

具体的な大学名を挙げる方が多かったです。

・ NIH, ユタ大学, カリフォルニア大学バークレー校, プリントン大学, MIT

・ 京都大学, 早稲田大学, 東工大, 東北大, 理研など

しかし、米国、英国、"English-speaking country"といった記述もあり、以下のコメントからも分かるように、**学術を追求する上で、言語の壁は大きい**ようです。

None in particular, but in an English-speaking country (or at least one with easier communication in English).

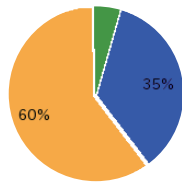
This is not a criticism of Japan - I blame myself for not speaking better Japanese. But this has certainly made many academic/research things more difficult for me here

(impossible to collaborate with interesting people because we can't communicate, impossible to get information directly, only through partial translation of helpful colleagues)

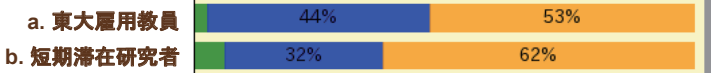
理系は「研究の水準」と働きやすさ（言語環境）、文系は「自身の研究テーマとの関連性」や「教育研究上有益な人との交流・刺激」を求めています。

外国人教員・研究者を東京大学に惹き付ける場合は、文系・理系、それぞれに方策を考える必要があります。

●あなたは東京大学以外の大学に行けばよかったと思っただけですか？(Q57)

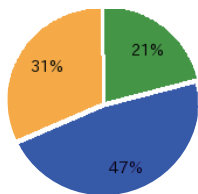


- a. 強く思ったことがある(思っている)
- b. 少し思ったことがある
- c. 思ったことはない

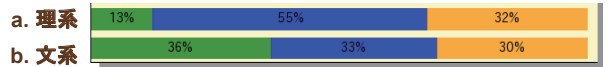


6割の教員・研究者が「思ったことはない」としています。...しかし、正規に雇用されている教員の方が迷いが大きいようです。

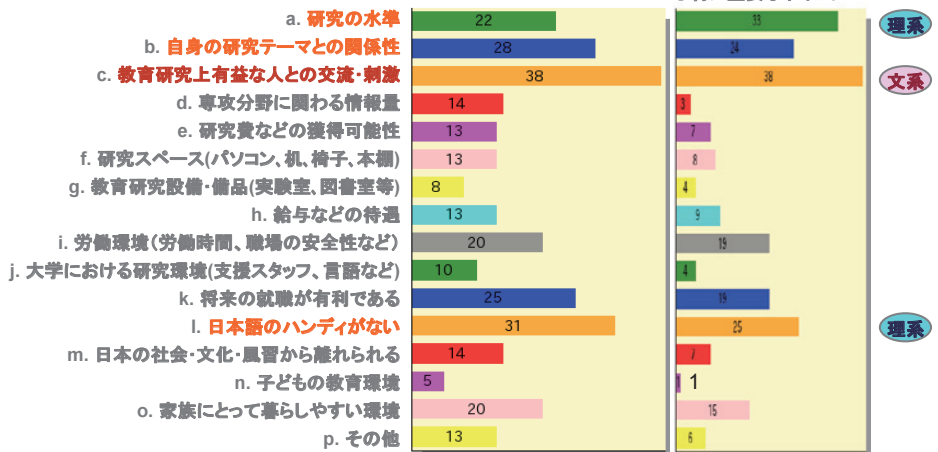
●思ったことのある方(Q57-a,b)に伺います。それはどこの大学ですか？



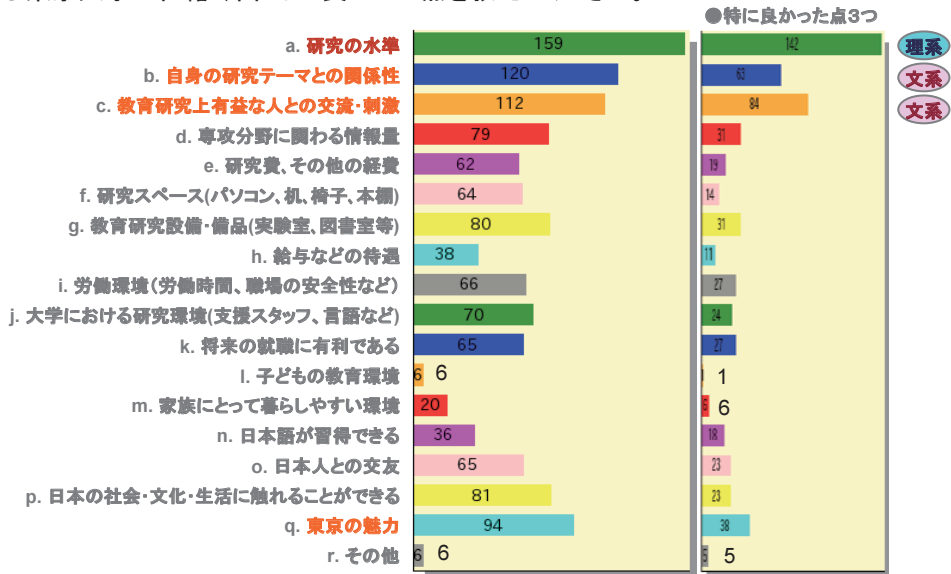
- a. 東京大学以外の日本の大学
- b. 日本以外の大学
- c. 特定の大学ではない



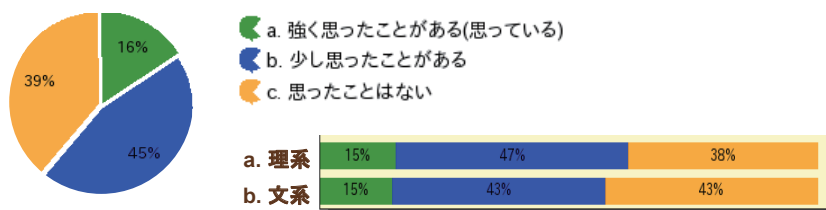
●その大学は、東京大学に比べて、どのような点がよいと思いますか？



●東京大学に在籍・滞在して良かった点を教えてください。

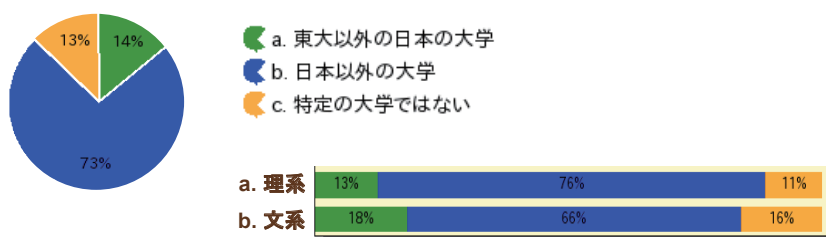


●あなたは東京大学以外の大学に行けばよかったと思ったことがありますか？(Q57)

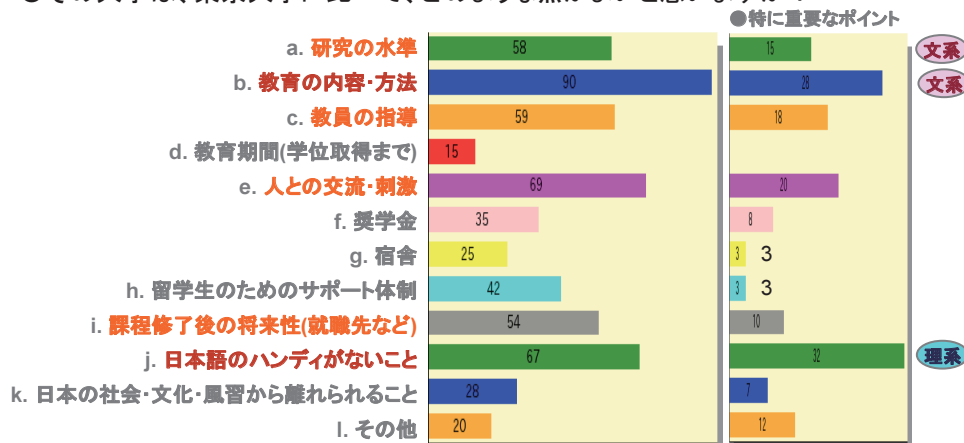


留学生の方が、外国人教員や研究者に比べて、東大以外の大学に行けば良かったと思う率が高いようです。

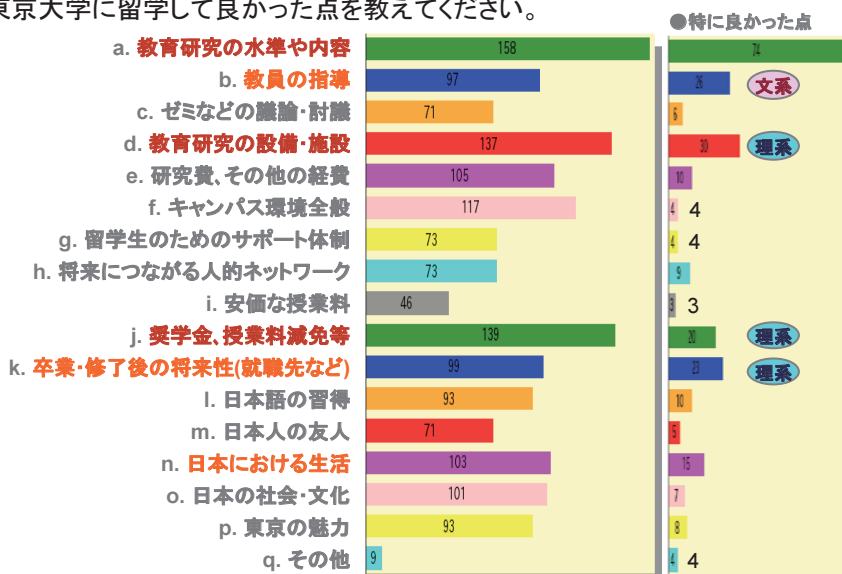
●思ったことのある方(Q57-a,b)に伺います。それはどこの大学ですか？



●その大学は、東京大学に比べて、どのような点がよいと思いますか？



●東京大学に留学して良かった点を教えてください。



東大以外の大学に行けば良かったか？(留学生の場合)

【留学生が、東大以外で行けば良かったと思う大学・国】

「米国」と「米国の大学」を挙げる学生が圧倒的に多く、また、「英語圏の大学」も多かったです。「ヨーロッパ」も複数ありました。

一方で、単に知名度や英語圏における活動のしやすさを求めるだけでなく、「卒業後の就職」や「教育のスタイル」を念頭においた大学選びもある模様です。

Harvard(USA), Oxford(UK) or any other that is widely recognized and **that is a passport for employment** and also, an attractive pole for businessman that are searching for experts.

The most surprising thing to me was to imagine that by **coming to Japan I would have more employment chances because both Asian and Western companies would give us more credit for that personal attitude.** However, the reality is different: whatever one likes it or not, it is the Anglo-Saxonic Academia that dictates all this. And it is there to stay. No Chinese businessman around, no credits from native countries. We became part of something 'exotic'.

I came to Japan because I am interested in Japan. **I have to say that this was a very bad idea for my scientific education and career.** (中略) **For better studies probably America or Europe** would have been better. **The reason is that the courses are based on discussion and understanding things, not on behaving correctly in a hierarchical system and on learning hard whatever is needed to pass an exam.**

留学生・外国人学生の満足度

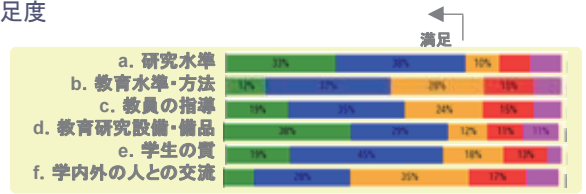
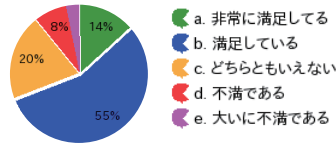
「良かった」とする留学生は、東大の研究水準や設備を挙げる以外に、**指導教員や友人が良かった**、とする場合が多いようです。一方で、**東大の教育方法については、多くの批判**が寄せられました。

一部の留学生については、その**生活の苦しさから良いところは全くなかった**とするなど、**生活基盤や教員・学生との人間関係が留学生の滞在満足度に大きく影響**することが分かります。

東京大学の提供する留学生サポート体制については、**宿舎・奨学金**が足りない、**英語による対応**ができていないといった不満以外に、「**留学生であるからよく分からないだろう的な適当な対応が気になる**。」「**留学生同士間の交流だけではなく、日本人学生との交流を増やして欲しい**。」といった意見が見られました。

●東京大学における教育について5段階で評価してください。1)非常に満足、2)満足、3)どちらともいえない、4)不満、5)大いに不満。

●東大の教育に対する全般的な満足度



○The research environment and the campus are absolutely great, but it would be even better if there were more English speaking staff member at OIS.

○I have been very fortunate to have a supervisor who has always supported me, both in academic and non-academic roles. I feel that this is a very rare trait and it has made my study at the University of Tokyo a great experience. Also, the financial support I've been able to receive from my laboratory and research group to attend conferences and seminars, both in Japan and abroad, have allowed me to gain a broader view of the world and the role of my research in making the world a better place.

○これまでではとてもいい経験ですが、**指導教員はかなり忙しいので、指導を受けることが大変**です。

○研究室の**上下関係が著しく**、客観的に、研究を議論することができません。

○I find that Japanese universities in general is very **lacking in terms of education**. I went to a university in America for undergraduate studies, and the difference in classroom education is unbelievable.

○一番の問題は学生の質である。**自分の周りには高い志をもって勉強に熱心に取り組む学生が少ない**。

○Frankly speaking **I was hurt badly due to lack of communication skills of Japanese students and staff** especially when Sensei doesn't have enough time.

○**経済的に厳しい生活をしているので楽しいことは何も無い**。奨学金もまだ決まらず宿舎にも入れず家賃を払うだけでせいっぱいだ。日本ではなくアメリカに留学すればよかった。

英語による講義

日本語による講義が十分に理解できないため、**英語による講義を希望**するとの声があるなかで、**英語による講義の質や教員・学生の英語力に対する懸念**が示されました。

一方では、**日本人学生の英語力強化のために英語の講義を導入するとよい**、といった声が聞かれました。

なお、**入試において日本語能力を問わないのであれば、講義も相応に英語で提供すべき**、との声が多数ありました。

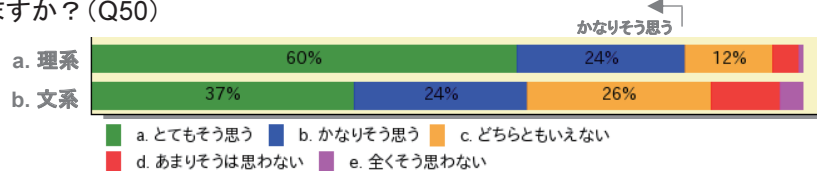
"If university accepts students without sufficient Japanese ability, education must be provided accordingly."

チューター制度

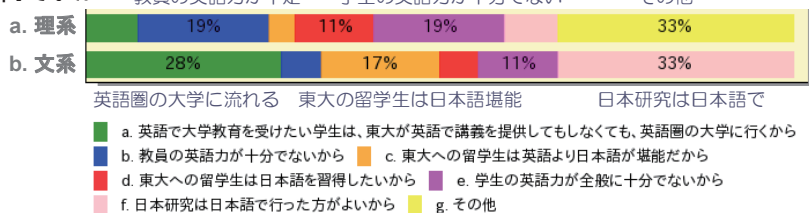
チューターには当たり外れがあるため、**チューターの役割を明確にし、チューターに事前説明すべき**、といったコメントが複数見られました。また、チューターの「**英語能力**」や「**時間的余裕**」を事前に確認した方がよい、といった意見も見られました。

チューターに十分に対応してもらえない場合に、**チューターを変更できる仕組み**やチューターの**評価制度**が必要、といった声もありました。これと関連して、「**複数組のチューター・留学生チーム**を作るとよいのでは」、といった意見も複数見られました。

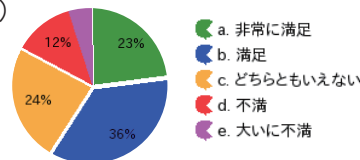
●あなたは英語で提供される講義などが増えると東京大学の魅力が向上すると思いますか？(Q50)



●そう思わない(Q50-c,d,e)と回答した人に聞きます。そのように特に考えられる理由は何ですか？ 教員の英語力が不足 学生の英語力が十分でない その他



●チューターがいたことのある人に聞きます。あなたはチューターに満足でしたか？(Q35)

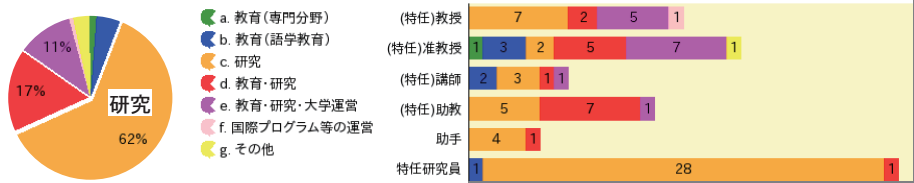


チューター制度については、「Great!」と称賛する意見と、批判的な意見が入り交じっていました。要は、**当たり外れがある**、ということのようです。

●不満と回答(Q35-d,e)した方に聞きます？どのような点が不満ですか？

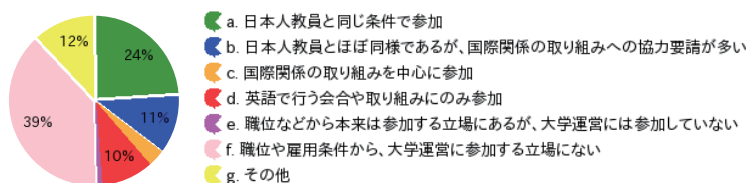


●あなたが東京大学で従事している中心的な業務内容(エフォート率6-7割程度)はどのようなものですか？

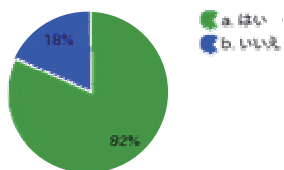


特任研究員として雇用されている方も多いため、「研究」のみに従事していらっしゃる方も多いようです。

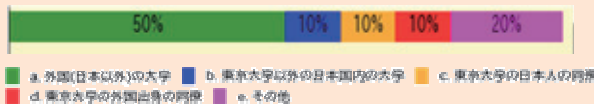
●教授会や各種の学内委員会など、あなたの大学運営への参加状況について教えてください。



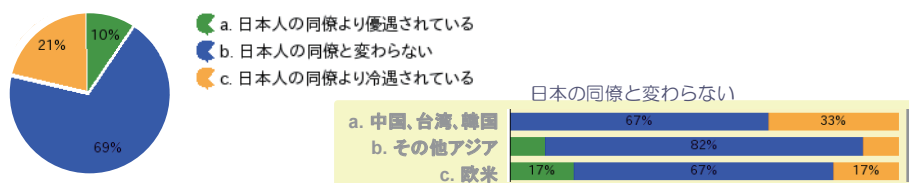
●あなたはご自身の経歴・業績・職位に照らして、適正な給与を得ていると思いますか？



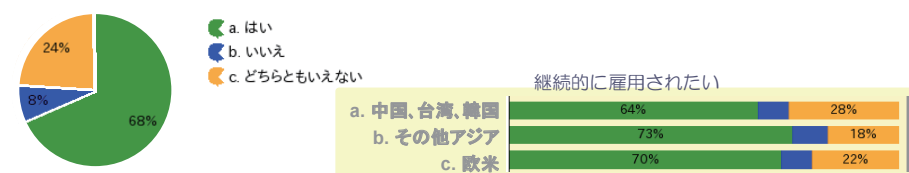
●Q34で「b.いいえ」と回答した方に伺います。それは、どこ(誰)との比較でそのようにお感じですか？



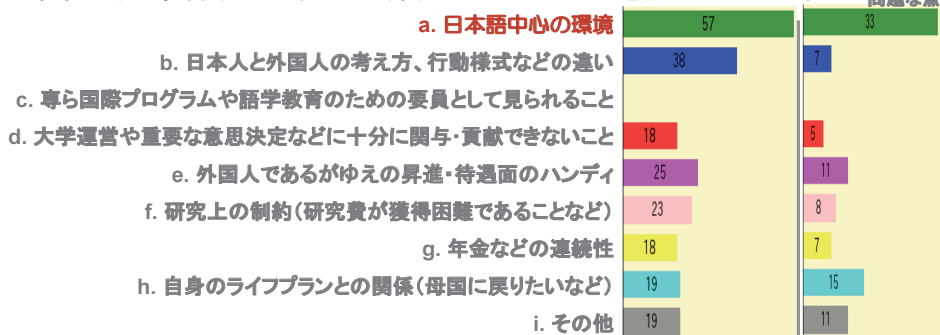
●東京大学の日本人の同僚と比較して、あなたはご自身の任期・職位・昇進などの条件についてどのように感じていますか？



●あなたは大学に継続的に雇用されたいと思いますか？ 任期の有無に関わらずご回答下さい。

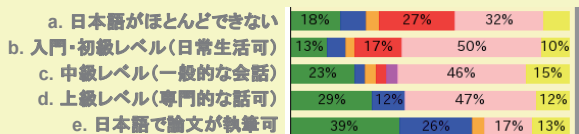


●東京大学で就労するにあたって、問題と感じている点を教えてください。



外国人教員の雇用環境

回答をされた外国人教員のうち7-8割の方が、ご自身の報酬や昇進を適正と捉えていました。また、7割近くの方が本学に継続的に雇用されたいとしています。



一方、言語や文化の差から、大学運営や意思決定に十分に参加できない、といった問題もあります。

・“Language barriers inevitably mean that the contribution that foreign faculty members can make to the development of the University is somewhat limited.

To improve this, the only solution really is for the meeting attendants to switch between Japanese/English frequently and whenever necessary. This is how meetings work in many other countries.”

・「日本人と同等の扱いではなくあくまでも外国人としての意見を求められることが多い。そして、重要な決定の際には意見が反映されないことが多いと思われる。おそらく日本人の考え方、行動様式とのギャップまたは理解困難がその要因でもあろう。そのため、外国人は自分の能力を十分に発揮できないことがあると思われる。」

また、特任研究員など任期付きで雇用されている方も多いため、常勤職への要望もあります。

・“Few foreign faculty are given opportunities for promotion because they are working on fixed-term appointments. Foreign faculty need to be given more opportunities for permanent employment.”

外国人研究者 着任時の 苦勞

誰が外国人教員・研究者の 着任時にサポートするか？

着任時に半数以上の方が、**受入教員**あるいは**研究室のスタッフ**のお世話になっています。次頁の**家族へのサポート**においても、受入教員と研究室のスタッフへの依存率が7割を超えるなど、外国人教員あるいは研究者を受け入れる場合の受入教員の負担には留意する必要があります。

受入教員によるきめ細かいサポートは、外国人研究者が安心して気持ちよく滞在する上で重要ですが、**過度の負担は心苦しき**にもつながります。このため、**外国人研究者のための支援センター**あるいは**各部局に英語のできる担当者への要望**が多数ありました。

・ I dislike always having to ask members of lab for help or assistance.

・ A standard package of materials and forms should be prepared for advisors to send to prospective researchers when someone first asks them to be their sponsor.

・ ONE CENTRAL PLACE please and people to talk to. Not thousands of papers to read!!!

一方、外国人研究者のための国際室等を設けている部局では、研究者の滞在満足度は高いようです。**受入教員によるホスピタリティと、実務的に支援をする担当者**あるいは**センターは、分けて整備**していくとよいようです。

・ My welcoming to ERI was very well organized, both from my academic host researcher and by the International Office. I have only positive comments about the support before and during my stay.

交流・コミュニティの形成

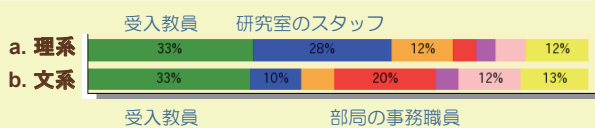
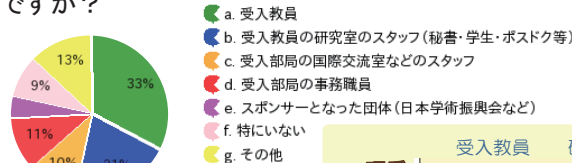
交流の場や、大学コミュニティへの要望が多数見られました。

・ A centralized support centre, which can also function as a social centre.

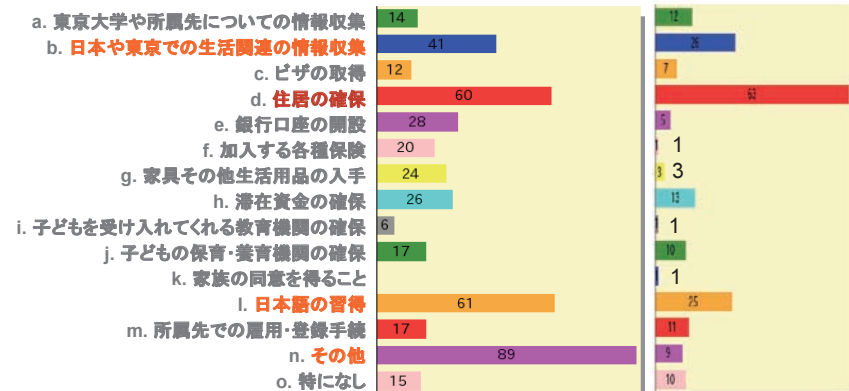
・ One area for improvement would be to have more of **a sense of community**. Perhaps a set of mailing lists with seminars and events should be available to sign up to upon arrival.

着任時の手続き

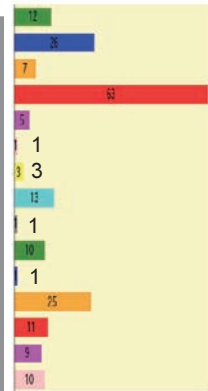
●あなたの着任時に、東京大学や日本政府などからの**手続書類や各種情報**(雇用・身分など学内に関する情報、**宿舎等生活情報**)を提供する窓口となったのは、主に誰ですか？



●着任にあたって、何に苦勞しましたか？

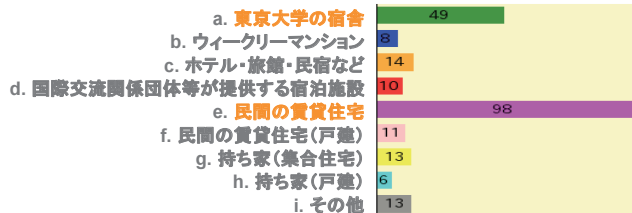


●特に東大に支援してほしい点

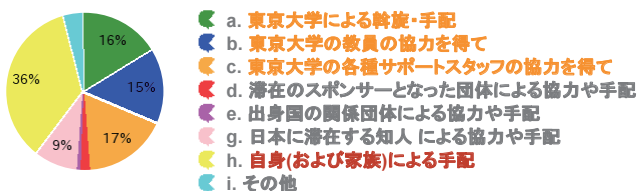


宿舎・生活環境

●あなたは現在、どのような住居に住まわれていますか。



●現在、住まわれている住居はどのようにして手配しましたか？

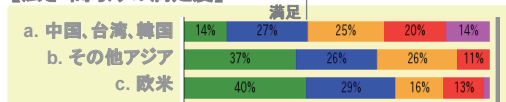


●あなたの住居環境について5段階で評価してください。1)非常に満足、2)満足、3)どちらともいえない、4)あまり満足していない、5)非常に不満。

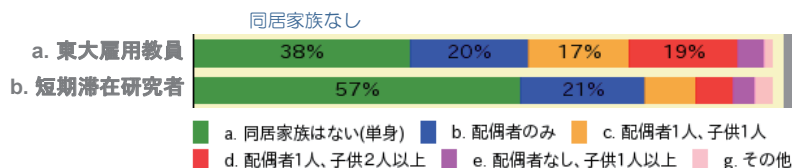


住居環境については、**広さ・家賃・通勤時間・文化環境・人との交流**、いずれをとっても、**欧米の方が**そして**アジアの方より満足度が高かった**です。

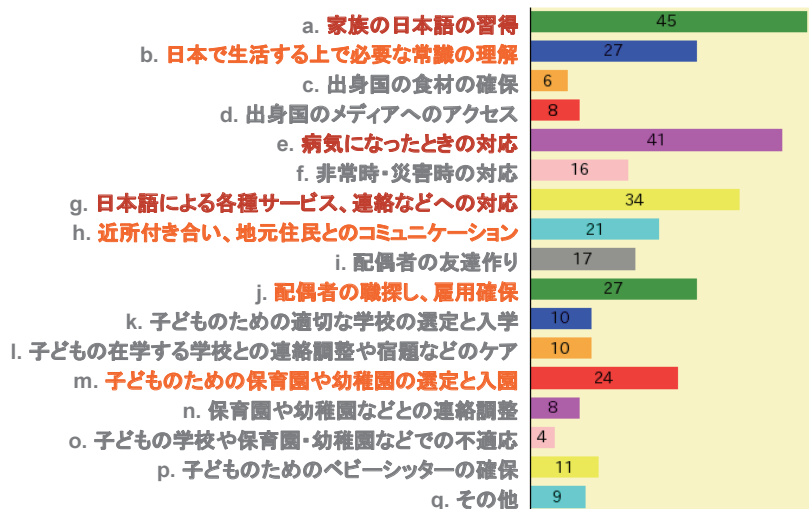
【広さ・間取りの満足度】



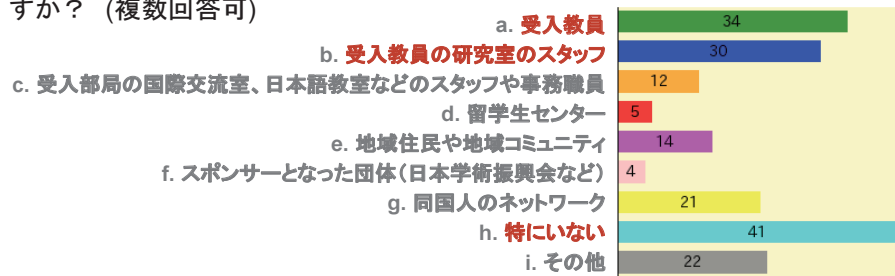
●現在、日本で同居している家族構成を教えてください。



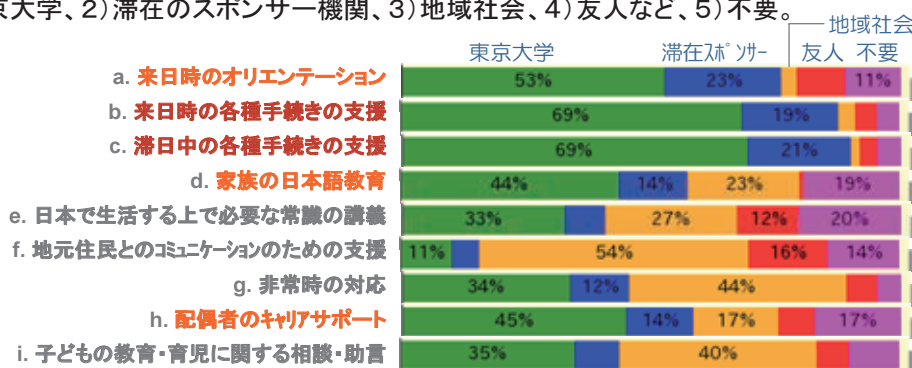
●ご家族と日本に滞在する上で、苦労している点は何ですか？(複数回答可)(Q10)



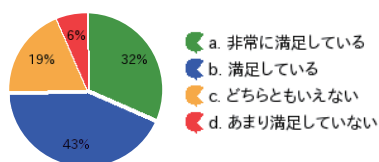
●現在、あなたのご家族はQ10に挙げる項目について、誰からサポートを得ていますか？(複数回答可)



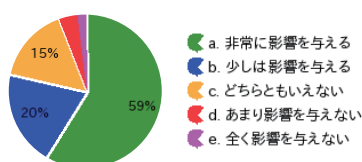
●あなたやご家族は以下のサポートを誰から得ることを最も期待しますか？ 1) 東京大学、2) 滞在のスポンサー機関、3) 地域社会、4) 友人など、5) 不要。



●あなたのご家族は日本における生活に満足していますか？



●ご家族の満足度は、あなたの東京大学の在籍(滞在)の継続に影響を与えますか？



家族へのサポート

■ 宿舎問題

家探しは日本人にとっても大変ですが、外国人については更に「外国人入居拒否」の壁があり、単なる東京の住宅事情の悪さ以上の苦労をさせられます。

・ I have experienced discrimination when trying to find housing in Japan. It was very difficult and time consuming. I feel very upset about that experience.

また、数ヶ月といった短期滞在の方も多いため、大学の宿舎に対する要望が多数寄せられました。白台等への入居された方は、老朽化や水漏れ、耐震性について不安は寄せられているものの、概して満足しています。なお、西千葉の宿舎は遠すぎる、との指摘がありました。

なお、住居を借りる場合の保証人がいないことの問題や、敷金・礼金等、着任時にいくらかの資金を用意した方がよいか、といった助言が着任前に必要といった指摘もありました。

■ 教育・保育問題

若い方あるいは子供を置いてこられる方が多いためか、学校より保育園に関する要望が多くありました。また、短期滞在者の子弟の預かり場所に対する要望もありました。

・ 結婚して、まだ子供はいませんが、やはり子供が欲しいか欲しくないか悩む原因の一つは、保育園のことです。研究や実験で、(中略)、女性であるため、子供ができれば職を確保できなくなるのではないかと、いつも心配しています。

・ Since most stays are short-term, and most public kindergartens require both partners to work (through the point system), it is very difficult to find public childcare.

■ 個別のケア

「外国人研究者」は多様で、個別のケアが必要との指摘がありました。

・ Foreign researchers' situations are highly individual- some are long-term foreign residents of Japan who speak Japanese fluently and already have accommodation, others are new arrivals with little language fluency.

事務支援体制

—研究者の場合—

—留学生の場合—

大学の事務手続きや事務文書については、**受入教員や研究室のスタッフ**が支援している場合が多く、**外国人教員の心苦しさ**、そして、情報へのアクセスの悪さにつながっています。

各部局に最低1名、英語で対応してくれる方への要望が多数ありました。

英語にしてもらいたい事務文書

○事務文書やメール・掲示板などに掲載される各種連絡・通知には外国出身の方の約半数が困っています。日本語で会話はできて、**文書を読み、理解するのは時間がかかる**、という意見が多数見られました。**漢字の習得が大きなネック**となっています。

このため、**文書や通知を全て電子媒体でダウンロード可能として欲しい**、といった要望が複数ありました。電子辞書で概要が把握できるようになり、他人を煩わせる必要がなくなるからです。

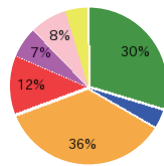
○留学生からは、断続的に送られてくる各種の**連絡・通知・案内を英文化**して欲しい、といった要望が多数寄せられました。“Information mails are as important as any document. (中略) Spending hours on a mail that you do not understand instead of doing research does not make you feel very happy!”

また、**入試・入学関連書類、履修届、奨学金申請書類**の英文化の要望も多数ありました。“These are the forms that all students will need to deal with when they are first here. Many international students only start to learn Japanese since then”.

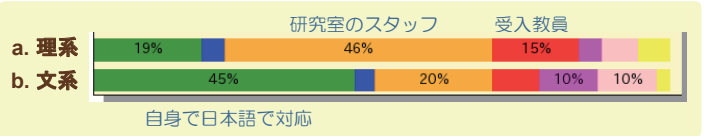
○外国人教員・研究者からは、**雇用契約書や辞令の英文化**とともに、“job responsibility”, “terms of employment”など、**業務内容の明示を求める声**が複数ありました。

そのほか、**大学の年間予定**のカレンダー（休業期間、入試、祝祭日など）の要望も多数ありました。

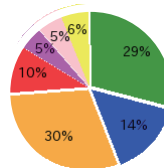
●(外国人教員・研究者向け設問) あなたは各種の事務手続について、どのように対応していますか？



- a. 自身で日本語で対応している
- b. 自身で日本語以外の言語で対応している
- c. 研究室のスタッフ(秘書・学生・ポスドク等)を通じて対応している
- d. 受入教員を通じて対応している
- e. 語学に堪能な部局の事務職員を通じて対応している
- f. 部局の国際交流室などのスタッフを通じて対応している
- g. その他



●(外国人教員・研究者向け設問) あなたは各種の事務文書や連絡・通知について、主にどのように対応していますか？

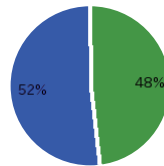


- a. 自身で特に問題なく読解し対応している
- b. 自身で苦勞しながら読解し対応している
- c. 研究室のスタッフ(秘書・学生・ポスドク等)が必要な情報を翻訳して連絡してくれる
- d. 受入教員が必要な情報を翻訳して連絡してくれる
- e. 語学に堪能な部局の事務職員が必要な情報を翻訳して連絡してくれる
- f. 部局の国際交流室などのスタッフが必要な情報を翻訳して連絡してくれる
- g. その他

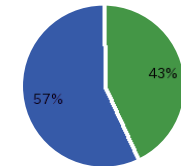
事務文書などについては、電子辞書などを活用して、自身で対応される方もいます。しかし、電子辞書を活用するにも、漢字の入力に苦勞をしていると聞きます。

●大学の事務文書(申請書類、連絡・通知など)の多くが日本語であることで困っていますか？

(留学生等)



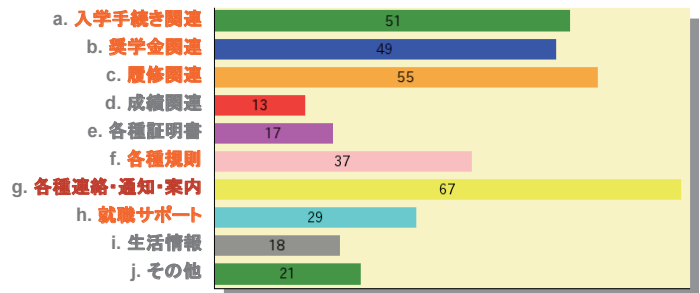
(外国人教員・研究者)



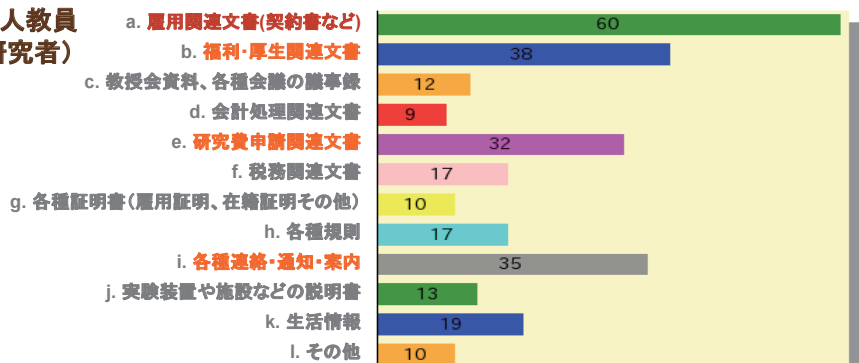
東大雇用の教員の方(49%)が、短期滞在の外国人研究者(42%)より困っていました。

●大学のどのような事務文書が日本語であることで特に困っていますか？

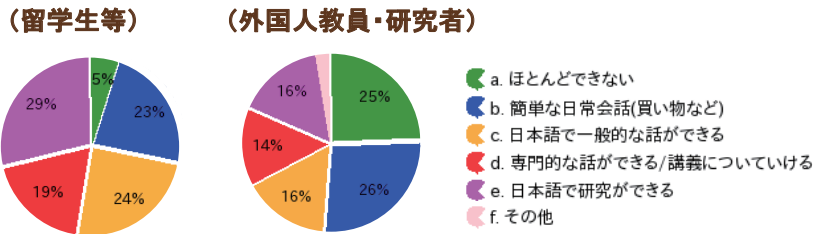
(留学生等)



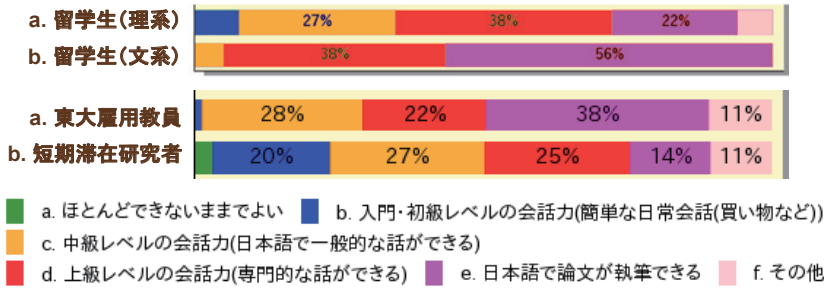
(外国人教員・研究者)



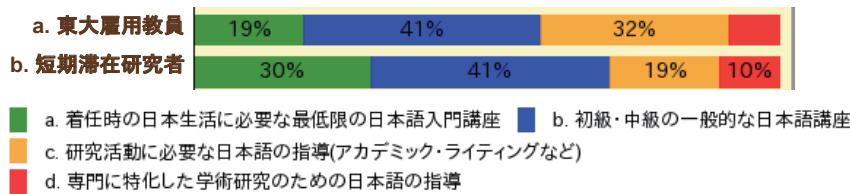
●あなたの日本語レベルを教えてください。



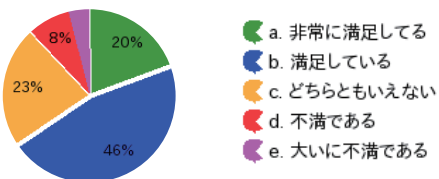
●あなたは東京大学の日本語教室でどこまで到達したいですか？



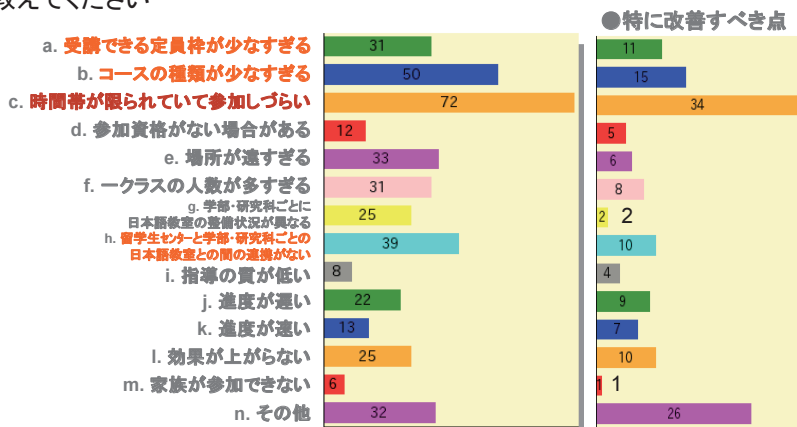
●(外国人教員・研究者向け設問) 東京大学が外国人研究者向けの日本語教室を作るとしたら、どのレベルの日本語教室を設置すべきだと思いますか？



●(留学生等向け設問) 東京大学の日本語教室に参加されている方に聞きます。あなたは東京大学の提供する日本語教室(留学生センター、学部・研究科の教室)に満足していますか？



●(留学生等向け設問) 東京大学の日本語教育で改善したほうがよいと思う点があれば教えてください



日本語教室 —研究者の場合— —留学生の場合—

日本語は外国人(特に漢字圏以外の欧米等からの外国人)にとって、覚えるのにとっても厄介な言語であり、さらに、理系や短期滞在の外国人研究者にとっては、日本語学習より研究を優先したい、という気持ちが強く、覚える意欲も低くなりがちです。

一方で、日本語の習熟度は、人とのコミュニケーションや、学内・社会における情報アクセスに大きな差をもたらし、滞在の満足度、ひいては、滞在継続の希望に大きな影響を及ぼします。

・ Of the foreigners I know, there is a remarkably strong correlation between Japanese ability and productivity and happiness.

留学生と外国人教員・研究者を比較すると、留学生は日本語で教育を受け、研究をすることを前提に上級以上の日本語を目標とする学生が多い一方で、外国人研究者は、理系/文系、短期滞在/雇用などによって、目標とするレベルが多様です。

外国人研究者については、全学で提供する日本語教室が現段階ではないため、とりあえずは、**着任時に最低限必要な日本語入門集中講座**を開設することが有用と思われます。同時に、**同伴家族のための日本語教室**についても4割以上の方が東京大学に期待しています。

なお、**日本語教室は、東京大学に滞在する外国の方の交流の場**としても期待されています。

留学生センターの日本語教室

留学生センターの日本語教育に参加された学生のうち**7割近くが満足**しています。また、**集中講座が効果的**であったとの声が多く見られますが、中級以上のコースについては1クラスの人数が多すぎる、といった指摘が複数ありました。一方で、**私費留学生については、定員に余裕がある場合しか受け入れられないといった問題も踏まえる必要があります。**

留学生センターが本郷にあり、駒場や柏からは通いづらいといった指摘が複数あり、日本語教育の改善点について「時間帯が限られていて参加しづらい」が最も多いなど、**大学の生活に適した開講時間・場所も、大学で提供する日本語教育の重要な要件の一つ**と考えられます。

東京大学が 目指すべき 大学像 —外国人研究者から

東京大学が目指すべき姿について、これまで学内の教員・職員・学生・外国人研究者に、本調査で意見を求めました。

極めて曖昧な質問、かつ、個人が日々考えるような内容ではないことから、**漠然とした回答が多かった**ように思います。

教員であれば、「世界トップの大学」あるいは「東大（アジア）らしい独自性を出した大学」、学生であればこれに付け加えて「教育」や「教育研究環境」の質の向上、職員であれば英語・中国語・韓国語で対応出来るようにするなどの「学内体制の整備」など。

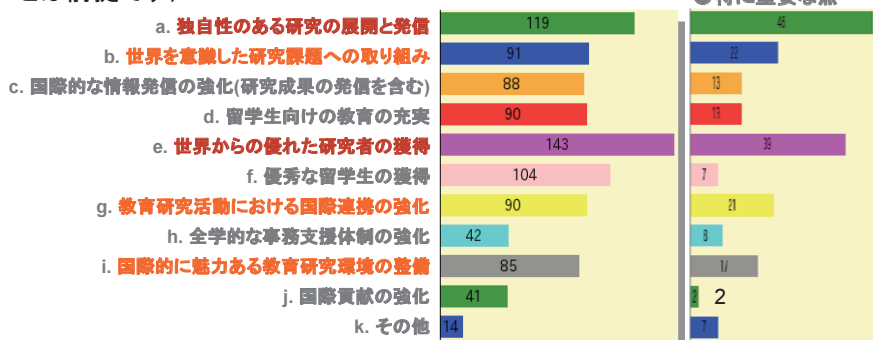
その中で、**外国出身の教員や研究者からは、東大が目指すべきは世界で卓越した大学である、ということ**を大前提として、「**世界に自らをもっと開くべき**」といった具体的な方策が提示されたように思います。

本調査では、東大が**すでに卓越した大学である**との意見（already a fantastic university with high quality of research, education and working conditions）や、**東大に滞在して大変満足であった**（I had a very good experience in staying at Todai.）との意見が相次ぎ、**大変勇気づけられました**。

しかし一方では選択式の設問でも自由記述でも、「**人との交流や刺激が不十分**」といった声をも多く聞かれ、随所に、「**hierarchical**」といった表現が見られ、教員の権威主義や**教員に対して意見が言いづらい**ことに対して批判が寄せられました。

東大がこれから力を入れていかなければいけないのは、**多くの人が行き交い、自由闊達な意見や議論がなされる、よりヴィヴィットで活気溢れる学内環境の整備**なのかもしれません。

●東京大学が世界の中でさらに発展していくために、これから何に力を入れていくとよいと思いますか？（東京大学の教員や部局がこれまで通り、教育研究の研鑽に励むことは前提です）



★東京大学は、世界の中でどのような大学となればよいか？

●世界に自らをもっと開いて！

東京大学が目指すべき姿については、「**世界に開かれた大学**」との声が圧倒的多数を占めました。

○Today should become more international. **As the most famous university of Japan, with a good reputation abroad, it is surprising how introverted Todai is.** This causes problems in terms of: 1) connection to wider scientific community; 2) originality of research; 3) ability of Japanese researchers to operate in an international environment (at conferences many of my Japanese colleagues just huddle together)

○I think Todai is already a fantastic university with high quality of research, education and working conditions and **should be more renown than it is.** What has to be done is to **connect more to the international community**, i.e., publishing in English, attending and hosting international academic events, etc.

○Today **should be more opened to the outside world.**

と同時に、**海外の優れた研究者をより多くリクルートすべき**、との意見が相次ぎました。

○In my field of research Todai already belongs to the leading institutions worldwide. This should be continued by **recruitment of outstanding academic staff** and further supported by international exchange programs.

○I feel **by opening to foreign excellent faculties**, researchers and students.

○My experiences have been positive, but **I wonder to what extent Todai genuinely desires to become 'international'.** I don't know what this means to the Japanese academic staff. So few researchers and academic are from outside Japan in this university, and there seem to be some very entrenched ethnocentric attitudes among some of the Japanese academic and administrative staff. While such attitudes prevail, Todai cannot become 'international'.

○Todai is one of the best research universities in the world. But **it is still most important to be Japanese to get a position.** If you compare to America, like Harvard, they try to get the best researchers from all over the world. I am German, and I wanted to stay in Japan, but now I work in America because of this.

●学生をもっとしごいて！

東大における**教育を強化した方がよい**、との意見も複数ありました。

○Before you can improve the quality of the international students/researchers, **you need to improve the quality of your domestic students and their curriculum.** There is too much emphasis on club activities and **not enough rigor on coursework.** Any top international students will not want to come until the undergraduate environment is improved.

○Education: **Try to transform from “producing graduates” to “teaching people”.**

○I believe as well that students will have to be encouraged to act a bit un-Japanese - to debate, to speak up, to boast, to argue, to contradict their supervisors, etc. I am not American either, but it seems, unfortunately, that the American way has become the standard. I found that foreign students/researchers were frequently dominating debates in international meetings, because the Japanese were very shy.

■ “外国人研究者”って、どんな人達?!

皆さんは「外国人研究者」と聞いて、どのような人物像を思い浮かべるでしょう?

世界における「大学の国際化」の加速の中で頻りに議論されるのが「優秀な外国人研究者の獲得」というもので、英国大学協会からは”Talent wars: the international market for academic staff”といったレポートが出ているぐらいですから、「外国人研究者」といったら**「優秀で」、「多額の報酬で獲得・招聘し」、自身とともに「多くの知見と人的ネットワーク」を伴ってくる人がイメージされているに違いありません。日本では更に、「欧米系」(アジア・その他地域の方、ごめんなさい!)、「日本語ができない」、日本語圏でも来て貰うためには**「宿舎の整備」、「子弟の教育環境の整備」、「学内における英語体制の整備」が必要!**、などが瞬時にイメージされるようです。**

今回のアンケートもそのようなイメージで、学内の外国出身の教員や研究者は満足しているのか、どうすればより多くの方に来ていただけるのか、といったことを問う設問を多く立てたところ、以下のように、**多数のご批判**をいただきました。外国出身の教員や研究者を**「単一の性格のグループと見てはいけない」「外国人を名誉ある客員としてばかり見てはいけない」「このような見方は、大学の国際化の障害となる」**など。

○If the University of Tokyo truly is committed to the project of augmenting its prestige and visibility on the world stage, sooner or later **it must reconsider the obsolete policy of treating foreigners like "honored guests,"**--i.e. temporary workers who are treated well for a short time, and then asked to leave--and instead offer the possibility of tenure to qualified foreign scholars who possess a proven record of scholarly distinction.

○I think it might be helpful if the Todai administration reconsidered the idea that foreign employees of all kinds can be dealt with as a single group, defined in distinction to employees who have Japanese citizenship. It seems to me that my experience at Todai is much more like that of my Japanese colleagues than it is like that of a visiting short-term foreign researcher. When I came to Todai I had already been living and working in Japan for more than 14 years, and at that time, I made a full commitment to this university. I do not think of myself as someone who is visiting "from overseas."

○Most of all, **Todai should do away with ghettoization of its foreign employees into some "international" (not "Japanese") category of employment and responsibilities, and the exoticization of itself as "Japanese" for foreigners,** and aim rather at a more rounded bilateral cultural, social, and linguistic experience that demands more complex intellectual productions/contributions.

実際、統計を見ると学内に雇用されている**外国出身の教員・研究者の66%はアジア出身**、19%が欧州出身、9%が米国出身、残り6%がその他出身で、「外国人研究者」と言っても見た目ではそれほど区別されません。アンケートでも、**3割の方が日本語で専門的な会話ができるほど日本語に堪能な方々**でした。また、在籍されている研究者の**半数以上が「特任研究員」**で、今まさに、東大から優れた研究業績を次々と輩出する源泉となっている方々です。

考えてみれば、東大の日本国籍の教員も優れた研究者で、海外に行けば名誉ある「外国人研究者」。われわれも、「外国人研究者の獲得」とあまり気負いすることなく、もっとリラックスして、同じ学術界の仲間として迎え入れ、同じ大学の一員として付き合いしていくことから始めていくといいのかもしれません。

“My stay in Tokyo and my work in the University of Tokyo in 2006 were excellent, fruitful and without any problems.”とあるように、**世界の研究者に慕ってもらい、優れた学術機関として世界で認められていくには、暖かいホスピタリティと仲間意識が第一歩**なのではないでしょうか?

【本件問い合わせ先】

東京大学国際連携本部国際企画部

担当: 中川淳司・船守美穂(ext.21683)、本部国際系・三枝和輝(ext.20263)

E-mail: intl_framework@adm.u-tokyo.ac.jp

調査結果URL: http://dir.u-tokyo.ac.jp/gaiyo/gakunai_chousa/ (学内のみ)

はみだし記事: 「外国人研究者」 再考

【後記】

このたびは「東京大学の国際化に関する意見と要望調査」(教員・職員・学生(留学生含む)・外国人教員/研究者対象)にご協力いただき、ありがとうございます。多くの方々に回答や、調査の周知・連絡などで、ご協力やご助言をいただきました。

ご迷惑をかけるだけかと思いきや、アンケートを通じて暖かい励ましのメッセージなどもいただき、大変勇気づけられました。今後ともどうぞよろしくお祈りします。

To all international researchers, faculties, students related to Todai:

Thank you so much to participate in our online survey. Your suggestions and comments were extremely valuable and we would like to express our thanks for your contribution to enrich our university.

We know that there is still much room left for improving our campus and we would like to seek advice from you, again. Please send us an e-mail, if you have any suggestions or can provide some help.

We are sorry that this report is mainly in Japanese. We hope you understand that this was necessary to transmit your message to the “Japanese” society.

Thank you again for your cooperation and we hope we can make our university better, together!

【備考】

本集計では、「理系・文系」をご回答いただいた方の所属部局を元に分類しました。

○理系＝理学系研究科；工学系研究科；農学生命科学研究科；医学系研究科；薬学系研究科；数理学系研究科；新領域創成科学研究科；情報理工学系研究科；医科学研究科；地震研究所；生産技術研究所；分子細胞生物学研究所；宇宙線研究所；物性研究所；海洋研究所；先端科学技術研究センター；全学センター；機構など

○文系＝人文社会系研究科；教育学研究科；法政治学系研究科；経済学系研究科；総合文化研究科；情報学環・学際情報学府；公共政策大学院；東洋文化研究所；社会科学研究所；史料編纂所；本部；その他

※この調査はインターネットアンケート形式で行われたため、調査結果に一部バイアスがかかっている可能性がありますこと、ご留意ください。

NEWS

一般ニュース

海洋アライアンス

海洋アライアンス、第6回国際アジア海洋地質学会議に参加

一般

8月29日(金)から9月1日(月)にかけて、高知工科大学において、第6回国際アジア海洋地質学会議(ICAMG VI)が開催された。共催者である海洋アライアンスは、現地にスタッフを派遣し、会議運営に協力した。

海洋地質学とは、気候・海洋環境変動、エネルギー資源や地震・津波等の被害をもたらす地殻変動などを研究する学問である。

本会議はアジア周辺海域の海洋地質学を専門とする研究者が地球表層で起こるあらゆる地学的現象についての理解を深め、地球表層圏の未来を予測し、地球と人類・生命との関わりを明らかにすることを目的として、約4年毎に開催する学術会議である。

今回はその6回目の開催で、中国、韓国、台湾、インド、アメリカ、タイ、グルジアなど世界各国から約170名もの研究者が集結した。

口頭発表では、「Asian Waters explored by advanced research tools of 21st century」(新たな研究手段で探る21世紀のアジアの海)というメインテーマのもと、ヒマラヤ・チベットに起源を発するアジアモンスーンと気候変動の歴史とメカニズム、西太平洋のガスハイドレート、深海掘削によるアジア周辺海域の環境・地殻変動などのセッションが行われた。また当面する地球環境問題や資源問題とも絡み、とりわけ「アジアの海」が抱える科学的課題の研究成果や地球史の環境変遷と生命の進化への理解など、多くの海洋地質学の知見が発表された。

さらにポスターセッションにおいても、約50もの興味深い研究成果が展示され、多くの人で賑わい、活発に

意見を交換している姿も頻繁に見られた。

近年は地球環境の短期的な変動の実態に注目が集まっている。本会議の活発な議論が、その要因解明につながることを期待したい。

海洋アライアンスが、このような会議を共催したことは、社会と接点を持ち、問題解決型の活動を推進する上で、意義深いものとなった。

次回の国際アジア海洋地質学会議は、2011年の春、インドのゴアにて開催予定である。

海洋アライアンス ホームページ

<http://www.oa.u-tokyo.ac.jp>



口頭発表の様子



ポスターセッションでの活発な意見交換

東京大学サステイナブルキャンパスプロジェクト(TSCP)室

CO₂削減、待ったなし!

一般

学内広報1375号にも紹介されましたが、本学がサステイナブルな社会の実現への道筋を示すプロジェクト(TSCP)が立ち上がり、まずは喫緊の課題として低炭素キャンパスの実現に向けた取組みを開始しています。

2012年度に2006年度比15%削減という目標に向けた熱源系対策と個別機器系対策の具体的実践や促進、2030年には50%という大きな目標に向かって、7月に発足したTSCP室が各種検討を進めております。

TSCP室は発足したばかりで未だ全学的に広く知られていない面もありますが、今回写真の通り、第二本部棟の入り口に総長揮毫のTSCP室看板を設置しました。

また、併せて東大ホームページにTSCPウェブサイトも立ち上げています。今後、様々な対策を通じて、各部署のみなさまとは接する機会があるかと思いますが、少しでもこの数ヶ月の取り組み内容を紹介します。

今年度は、本学の全ての蛍光灯が高効率蛍光灯となるように一斉交換工事を実施しています。また併せて各種調査依頼を実施し、今後の個別機器系対策の検討に活用しているところです。来年度以降の対策は、ホームページなどを活用し、各種お知らせや情報提供を行いながら対策を講じたいと考えています。さらに、大型熱源系の対策については本部施設・資産系の環境グループと協働して設備の稼働実態調査を行い、今後の更新計画やエネルギー管理のあり方、将来を見据えたエネルギーインフラ計画などについても検討を進めているところです。

世界中でCO₂削減が待ったなしの状況になり、日本でも様々な分野でその削減に向けた取り組みが始まっていますが、総長のおことばにもあるように本学は教育機関としても社会を先導する責務がありますので、全学のみなさま、引き続きTSCPへのご協力よろしくお願ひします。

◆ TSCP ウェブサイト <http://www.tscp.u-tokyo.ac.jp>



TSCP 室看板設置

本部奨学厚生グループ

「東京大学光イノベーション基金奨学金」平成20年度受給者証書授与式を開催

光科学関連の先端企業8社のご寄附により、産学連携型の特定領域奨学金としては、初めて設立された「東京大学光イノベーション基金奨学金」の受給者証書授与式が、9月18日（木）に、関係教職員及びご寄附いただいた企業各社の方々の臨席の下に本部棟12階中会議室で開催された。

本奨学金は、先端光科学領域の研究に従事する大学院修士課程2年生のうち、特に優秀な者に月額15万円を平成21年3月までの12ヶ月間支給することにより、その学術研究への取組みを支援するものである。

基金へ拠出いただいているのは、ウシオ電機株式会社、オムロン株式会社、オリンパス株式会社、シグマ光機株式会社、日亜化学工業株式会社、浜松ホトニクス株式会社、株式会社ブイ・テクノロジー、富士フィルム株式会

社（以上、五十音順）である。

今年度は、研究業績、成績等を厳正に審査した結果、2名が奨学金を受けるにふさわしい特に優秀な者として選考され、浅島誠理事・副学長から受給者に受給者証書が手渡された。

浅島理事・副学長からは、「受給者には、本学のみならず、ご厚意をいただいた企業各社の方々も期待しています。研究に最大限の努力を傾注し、大きな成果をあげていただきたい。また、ご寄附いただいた企業各社には大変感謝しています。本学は今後も教育研究の一層の充実・発展に努力していきます。」という挨拶があった。

次いで、企業各社を代表して株式会社ブイ・テクノロジー専務取締役梶山康一氏から「奨学金受給者として選考されたお二人を祝福するとともに今後の更なるご活躍を期待しています。」という祝辞が述べられた。最後に受給者の二人からは、基金拠出企業に対する感謝の気持ちが述べられるとともに、本奨学金受給者としての自覚を持ち、より一層努力していく旨のスピーチがあった。



受給者との記念撮影

生命科学研究ネットワーク

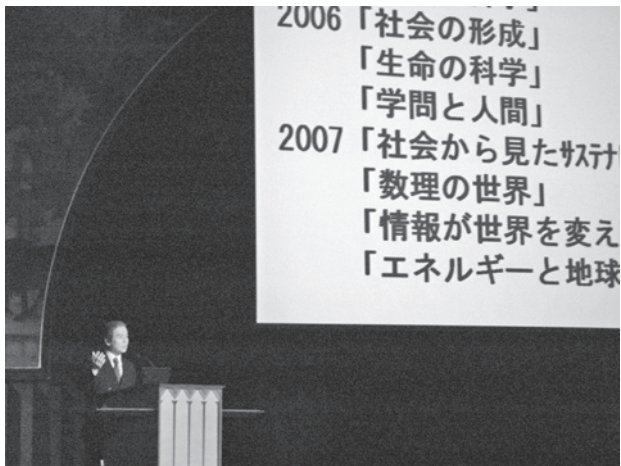
生命科学研究ネットワークシンポジウム2008「生命科学の広がりに向けて」開催

9月23日（火・祝）10時から安田講堂及び工学部2号館において生命科学研究ネットワーク主催により生命科学研究ネットワークシンポジウム2008「生命科学の広がりに向けて」が開催され、本学の大学院学生を中心に教職員及び一般の聴講者等、合わせて約840名の参加を得て盛況のうちに無事終了した。

シンポジウムは、講演の部（安田講堂）とポスターセッションの部（安田講堂、工学部2号館）から構成された。

講演の部では、山本正幸生命科学研究ネットワーク長（理学系研究科長）の挨拶、小宮山宏総長の挨拶を皮切りに、「線虫C.エレガンスの化学走性行動と学習を制御する分子と神経回路」と題した理学系研究科・飯野雄一教授の講演、「フェロモンによる個体間コミュニケーション」と題した新領域創成科学研究科・東原和成准教授の講演、「2光子励起顕微鏡で見る脳の運動するシナプス」と題した医学系研究科・河西春郎教授の講演が行われ、生命科学の最先端の講演に受講者も熱心に聞き

入り、それぞれ活発な質疑応答が行われた。最後に神谷律教授（シンポジウム実行委員長／理学系研究科）の挨拶があり、講演の部は終了となった。



小宮山総長挨拶（安田講堂）



ポスターセッション会場（工学部2号館）




ポスターセッション会場を視察する小宮山総長（安田講堂）

ポスターセッションの部は、講演の部を挟む午前と午後の二部構成で行われ、大学院生を含む若手研究者を中心に、昨年度を上回る 335 題の演題登録があり、安田講堂回廊、同4階ロビー、工学部2号館フォーラム、同展

示室の4会場で発表が行われた。昨年度と同様に、ポスターは研究科ごとではなく研究分野ごとに配置されたため、関連分野の研究者同士で、部局を超えた交流と活発な議論が繰り返された。本シンポジウムの目的の一つである、学内における生命科学研究者間のコラボレーションとコミュニケーションの促進にむけた、有意義な時間となった。



ポスターセッション会場（安田講堂）



一般

地球観測データ統合連携研究機構（EDITORIA）

「データ統合・解析システム（DIAS）」

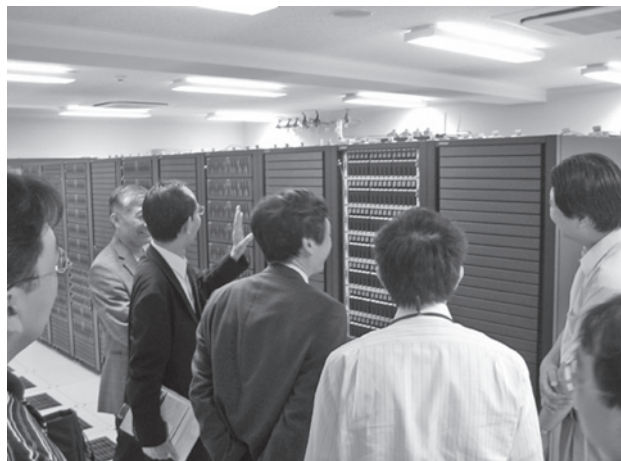
を文部科学省研究開発局審議官が視察

9月24日（水）生産技術研究所にて、地球観測データ統合連携研究機構（EDITORIA）が国家基幹技術「海洋地球観測探査システム」の基幹要素として担っている「データ統合・解析システム（DIAS）」のコアシステムを文部科学省研究開発局の田中審議官が視察に訪れた。10時30分から小池機構長によるプロジェクトの概要説明が行われ、11時からの喜連川生産技術研究所教授によるシステムの説明の後、11時30分からコアシステムの見学が行われた。



小池機構長によるプロジェクトの説明

プロジェクトの概要説明においては、小池機構長から「分野を超えて共有できる知の創出」、「世界で共有できる知の創出」、「体感できるデータと情報の提供」、「公共的利益分野への貢献」、「実用化技術の開発」における実績の報告があり、今後、「温暖化への貢献」、「国際貢献」をさらに強化していく方向性が強調された。



コアシステムを視察する田中審議官

約 700 テラバイトの磁気ディスクアレイからなるコアシステムの見学においては、様々な地球環境問題を解決するための政策決定に必要な情報を提供するシステムを目指しているだけに、「システムの電力監視の重視」や「使用していない部分の電力の抑制」という省電力で環境にやさしいエコなシステムになっている点が、喜連川教授より強調された。

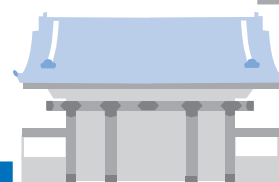


電力管理システムを紹介する喜連川教授

様々な観測データを統合・解析し、様々な問題に対する解決策を考え、様々な国の政策決定に影響を与えるためのシステムが本学で動いているのである。

地球観測データ統合連携研究機構 (EDITORIA)
<http://www.editoria.u-tokyo.ac.jp/>

部局 ニュース



東洋文化研究所

平成 20 年度漢籍整理長期研修を実施



東洋文化研究所附属東洋学研究情報センターでは、6月16日(月)～20日(金)及び9月1日(月)～5日(金)の計2週間、漢籍整理長期研修を実施した。本研修は、全国の大学図書館等職員に漢籍の整理技術を普及する目的で、1980年から実施している。講義と実習は、四部分類・目録法概説、中国書籍史、朝鮮本・和刻本の解説、漢籍目録法・補修法実習など、幅広い関連知識を習得できるように計画されている。講師として東洋文化研究所の教員に加えて、京都大学人文科学研究所井波陵一教授、麗澤大学藤本幸夫教授など8名の所外専門家の協力があった。今年度は全国から10名が受講した。



漢籍目録法講義



漢籍補修法実習

大学院人文社会系研究科・文学部

第12回東京大学文学部公開講座が開催される

部局

7月4日（金）に、大学院人文社会系研究科・文学部と北見市・北見市教育委員会との共催による第12回東京大学文学部公開講座が開催された。

この講座は、昼間の高校生を対象とした講座と夜の一般を対象とした「常呂公開講座」とに分けて行っている。

「常呂高校特別講座」は北見市の常呂高等学校にて、井上正仁法学政治学研究科長による「自分の視点、自分の感覚、自分の言葉で参加する司法-裁判員制度を考える-」の講演が行われ、高校生にとっては近い将来の身近な問題として、在校生全員が熱心に聞いていた。

次に行われた「常呂公開講座」は北見市常呂町中央公民館大講堂を会場として、立花政夫人文社会系研究科長から挨拶があり、引き続き本研究科丸井浩教授による「無分別のすすめ-頭を空っぽにすることの大切さ」及び赤川学准教授による「人口が減っても大丈夫な社会とは？」による講演が行われ、大勢の市民が熱心に聴講した。



常呂高校での講演



北見市常呂町中央公民館大講堂での講演

大学院工学系研究科・工学部

イアエステ（IAESTE）研修生歓迎会開催される

部局

8月1日（金）、本郷キャンパス工学部2号館フォーラムにて、イアエステ（IAESTE）研修生の歓迎会が行われた。イアエステは理工農薬系学生のための国際インターナシップを仲介している国際非政治団体である。国際的な広い視野を有するエンジニアを養成することを目的として、1948年以来、ヨーロッパを中心に活動を続けているユネスコ、国際経済社会理事会及び国際労働機関を諮問団体として、4千社に及ぶ企業の後援を軸に、現在世界80余カ国が加盟し、これまでに30万人近い学生を相互に交換してきた。

イアエステの日本委員会であるイアエステ・ジャパンは、「日本の大学に在籍中の理工学系学生の諸外国における技術研修および諸外国の理工学系学生のわが国における技術研修を援助し、国際親善と相互理解の増進に寄与すること」を目的としている。理事役員メンバー（東京大学等の理事校教員や賛同企業の関係者）の指導の下、事務局職員と学生ボランティアによって運営されている。

本学では、海外への学生の派遣の他に、日本への受け入れも行っている。今年度はドイツ、ポーランド、ノルウェー等から20名の研修生を受け入れた。研修期間は個人で異なるが、多くは7月から9月にかけてである。研修生には、イアエステの日本人学生ボランティアが1名付き、滞在中のサポート等を行っている。

今回実施された歓迎会は、工学部における学生、教職員および卒業生の親睦団体である丁友会と、イアエステによって共催された。18時から20時まで開かれ、研修生をはじめ、そのホストファミリーや、受け入れ研究室の関係者、学生ボランティアなど総勢約80名の方々に参加していただいた。ホストファミリーの方々もご家族で参加され、歓迎会はとても盛況だった。また、研修生や、ホストファミリー、大学関係者のとても良い交流の場ともなった。



2008年度イアエステ研修生歓迎会

大学院農学生命科学研究科・農学部
**大内清海氏の「米寿をお祝いする会」
 が開催される**

9月5日（金）17時より、8月に竣工されて間もない弥生講堂アネックスにおいて、実験用ガラス器具作成技術者の大内清海氏（（株）オオウチサイエンス取締役社長）の満88歳をお祝いする会が開催された。

大内氏は終戦間もない1946年2月より農学部2号館4階の一室にてガラス器具の作成を開始し、その後62年の長きにわたり旧農芸化学科、現在の応用生命化学専攻・応用生命工学専攻を中心として農学部の研究を支えてきて下さっている方である。既存のガラス器具では行えない実験のためにスタッフと相談しながら工夫を重ねて開発した器具や装置は数多く、化学実験を経験したことのある人なら誰でもご存じであろう駒込ピペットを初めて作成したのは何と大内氏である。他にも微生物培養で活躍している坂口フラスコや、フラッシュエバポレーター、また特殊なものでは熊沢式試料調製装置などが知られている。また約40年前から今日に至るまで毎年、学部3年生の学生実験に対するガラス細工の技術指導をして下さっている。

今回の祝賀会ではまず、多年にわたる研究・教育活動への貢献に対して生源寺眞一研究科長より感謝状が贈呈された。引き続き応用生命化学・工学両専攻の教員を代表して北本勝ひこ専攻長より感謝状が贈呈されたが、本祝賀会にかけつけてご祝辞を下さった名誉教授の先生方を含めほとんどの教員はその昔、学生時代に大内氏にガラス細工の指導を仰いだ人たちであり、大内氏の88歳の誕生日を心からお祝いをした。

祝賀会の最後には、大内氏がこれからも健康で「100歳まで現役」を目指して頂きたいとの思いを込め一同でエールを贈り散会となった。



生源寺眞一研究科長より感謝状を贈呈される大内清海氏



大内氏ご夫妻を囲み参加者の集合写真

大学院農学生命科学研究科・農学部
**「第11回関東甲信越地区農学部附属
 演習林技術職員研修」を開催**

9月9日（火）～12日（金）、標記の研修が大学院農学生命科学研究科附属演習林・秩父演習林で開催された。北は北海道から南は和歌山までの11の大学演習林の技術職員13名の参加があった。

演習林は、「林業」として森林を管理するだけでなく、森林科学に関する学生実習・研究を行っている。これらの業務の中には安全衛生のリスクマネジメントを取り入れるために必要なプログラムが生まれ、講義と実習を受けた。

初日には、農学生命科学研究科安全衛生管理室の高橋特任教授、および秩父労働基準監督署の署員から、それぞれに安全衛生の基本事項や林業の災害事例について講演をいただいた。林業は他の職種に比べると災害確率が高いこと、その原因として、作業現場が山間地で機械化が進まないこと、自然が相手であること、それらに加え作業環境も多様であることが関係している、という説明があった。

2日目には、まず、山岳救助の経験豊富な消防署員により、山の中での負傷者の搬送方法や救命救急法の講習が行われた。続いて、本学演習林研究部の荒木田統括技術長による「東大演習林におけるリスクマネジメントの考え方」、秩父演習林の芝野技術主任による「リスクマネジメントによる危険要因洗い出し」の講義が行われた。危険要因の洗い出しを行うことによって、安全衛生の意識を向上させ、その結果リスクを低減させることができることを学んだ。また、秩父演習林の齋藤助教による「山の神と日本人～伝統に見る安全衛生意識～」の講演があった。



消防署員による負傷者搬送方法の実演

3日目には、これらの講義を受けて、災害事例が多い伐倒作業を安全に行う方法を実習により学んだ。具体的な内容は「伐倒作業における安全管理」、「かかり木処理作業における安全管理」、「チェーンソーの整備取扱」である。



伐倒作業実習

最終日は、秩父市内の製材工場を見学し、民間企業における安全衛生管理を学習した。

夜の情報交換会においても連日講師を交えて盛んな議論がなされるなど中身の濃い4日間であった。

今後は、今回の研修の成果をそれぞれの職場で生かして、災害ゼロを目指していただきたい。

医学部附属病院



医学部附属病院で大震災対応への一斉防災訓練が実施される

9月9日(火)13時30分から、「附属病院大震災対応への一斉防災訓練」が入院棟A・B、中央診療棟2等において約400名の教職員と約100名の医学部学生の参加により行われた。傷病者役の医学部の学生たちには特殊メイクが施され、治療を受ける側で実体験してもらい、将来治療する側に立ったときに役立ててもらえるよ

うにした。今回の訓練計画は、昨年までの取り組みを基本ベースに、環境安全本部や生産技術研究所都市基盤安全工学国際研究センターとの共同研究の成果を取り込んで、立案された。想定としては、東京に大規模直下型地震が発生し、地震の影響によって、入院棟A7階南から出火、入院棟B5階の壁に亀裂発生、マグニチュード7・震度6強の震災により、附属病院に多数の傷病者が運ばれたという内容で実施された。地震発生後直ちに、災害対策本部が入院棟A1階レセプションルームに設置され、初期消火、患者の避難誘導、各病棟のフロアチェック、トリアージ(※)及び救急外来アクションカードの運用、ライフラインチェックを実施し、全学災害対策本部との相互連絡を行った。また、新たな取り組みとして、緊急地震速報システムの放送、参加医師・看護師にトリアージに関する事前訓練(講習)を行った。

災害拠点病院に指定されている医学部附属病院は、地域の医療救護活動の重要な拠点となることが期待されている。電気、通信、上下水道等のライフラインに大きな被害が生じた場合であっても、限られた医療機能を最大限に利用して、負傷者への医療救護活動を行うことが強く求められている。附属病院では、今回の防災訓練の反省・提案事項を参考に、一層の防災意識の高揚を図ることとしている。

※トリアージ (triage)

医療機能が制約される中で、一人でも多くの傷病者に対して最善の治療を行うため、傷病者の緊急度や重症度によって治療や後方搬送の優先順位を決めること。



はしご車による入院棟Aからの非難訓練の様子



傷病者の搬送、治療訓練の様子

今回から始まりました「フロンティア生命科学」は、生命科学教育支援ネットワークが、学内の生命科学分野で活躍される先生方に、直接お話を伺って、これから生命科学の分野で研究を始めようとする学生の方はもちろん、この分野とは関係のない方まで、すべての人に生命科学の楽しさをお伝えすることを目的にした連載です。第1回目は、生命科学教育支援ネットワーク長でもある、理学部福田裕穂先生にお話を伺いました。

先生が研究者になるまでをお聞かせください



私が高校から大学に進んだ1970年代は、学生運動が終わって、社会が公害の問題に目を向けるようになっていました。公害の問題は、都市工学のような、工学で解決できるのではないかと考えていましたが、宇井純（著名な公害問題研究家）の東大での講義などを聴講するうち、これが化学や生態学の問題ではないかと思うようになりました。理学部に進学すると、生態学はあまりに複雑な対象を扱うため科学として私が扱うのは難しいのではないかと思うようになり、物質（植物のホルモンなど）の生理作用や、植物の形に興味が移っていきました。当時の理学部にはチューター制度というものがあって、これは、学生が興味のある内容を、先生を指名して一緒に勉強できるというもので、先生の負担は大きいですが、学生の私にとっては非常によい機会でした。多才な友人たちが、修士から新聞社や広告業界への就職を決めつつあった、修士課程2年生の夏休みに、その後、世界中で使われるようになる実験系の開発に成功したため、博士課程へ進学し、研究者への道を歩き始めました。

現在のご研究は、どのような内容でしょうか？

ある1つの状態に分化した細胞が、別の状態へ再分化するメカニズムに興味があります。材料にはハクニチソウの葉を用いています。これは私が修士課程2年生の時に確立した系で、乳鉢でゴリゴリと破碎するだけで、細胞一つ一つが元の性質を保ったままバラバラになります。この方法でバラバラにした葉の細胞は光合成能を保っていますが、ホルモンを処理することで、葉としての性質を失わせ、道管の細胞に分化させることができます。この系を利用して、道管への分化を促進する遺伝子や、逆に阻害するペプチドの発見など次々と新しいことが分かってきています。

また、ゲノムが解読されていて、遺伝学が使えるシロイヌナズナを利用して、ハクニチソウの系で発見した因子の生体内での働きを研究しています。

研究の面白さや、理学研究の意義について

本当に新しい『役に立つ』ことは、本質的なことを理解しないと創造できないのではないかと思います。何かに役立てることを前提に、既存のモノや知識の延長として研究・開発することももちろん大切ですが、より大きなパラダイムシフトのようなことは、何かを突き詰めてより深く知ることから生まれると考えています。50年後に『役に立つ』ために、理解を極める研究こそ、理学部の持ち味ではないでしょうか。

これからこの分野を目指す学生に一言

素直に面白いと思う事を徹底的に深める能力を身につけて欲しいと思います。意外に思うかもしれませんが、植物研究は分子レベルの研究ツールがそろっているのも、アイデアで勝負が出来る分野です。特にジェネティクス（遺伝学）や分子生物学を専攻することを考えている学生には強く勧めます。また、血を見たくない学生にもお勧めします（笑）。



生命科学教育支援ネットワークからのお知らせ

8月28日に、生命科学構造化センターから「写真でみる生命科学」（東大出版会）が出版されました！私たちも編集に協力しています。色々な生物や、偉大な生命科学者の写真、それに実験に使われる器具まで様々な写真が満載です。CD-ROM付属なので、講義などに利用するとき便利です。生命科学教育支援ネットワークのホームページでは、学内で開催される生命科学関連セミナーの情報を1箇所集積するためのカレンダーを作っています。まだ、出来たばかりですが、お知らせしたい情報がありましたら、下記までご連絡ください。

INTERVIEW

政策ビジョン研究センター (PARI)
センター長 森田 朗 先生
(法学政治学研究所、公共政策学連携研究部)

今回ご紹介するのは、今年の7月に発足した、政策ビジョン研究センターの森田朗センター長です。様々な問題を解決するために、研究成果を活用した政策形成が求められている現代社会において、東京大学では、大学で生産された知を社会に広く発信し、貢献すべく、小宮山総長のアクションプランの下、政策ビジョン研究センターが設立されました。

学内外から今、注目を集めている政策ビジョン研究センターの森田先生に、走り始めたセンターの活動について伺いました。

Q. 発足の経緯は？



森田 政策ビジョン研究センターの設立については、もともと小宮山総長のアクションプランに書かれていたことでした。今は大学が大学の中に閉じこもっている時代ではありません。そこで、大学で生産された知識を自ら社会に発信するために、政策ビジョン研究センターというものを作ろう、ということになりました。

そして、どのような形態の組織がよいか議論した結果、部局横断的なテーマを扱うため、特定の部局の傘下よりも全学的な組織の方が良いということになり、総長室総括委員会の下での機構として設立することとなりました。

Q. センターの役割と活動内容は？

森田 東京大学ではそれぞれの教員が最先端の研究をしているわけですが、その学内の様々な研究成果を社会に政策の選択肢として発信する組織にするのが、センターの在り方としては望ましいのではないかと私たちは考えています。つまり、客観的なデータに基づいて、具体的に「こうすれば社会的な問題は解決できる」「こういう解決策もある」ということを社会に発信していくことが、このセンターの役割だと思っています。

テーマについては、既にある社会のニーズを基に設定する場合もありますが、社会でまだ認知されていない問題をテーマにする場合もあります。研究者であるがゆえに専門の見地から、将来の課題が予測できるということがあるのです。つまり、センターは積極的にニーズを作り出し、社会に発信するという役割も担っているのです。

具体的な活動としては、シンポジウムをはじめ、政策提言の発表やホームページでの情報発信などを行うつもりです。アウトリーチの際は専門用語ばかりですと、一般の方が混乱してしまうことがあるので、専門的知見を翻訳してわかりやすく説明し、広く理解してもらうことが重要だと思います。

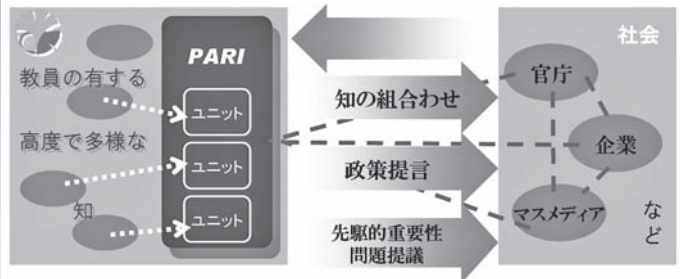
Q. 政策を提言する上での、総合大学の強みとは？

森田 総合大学の強みは、色々な学問分野を結び付けて政策や社会の在り方を考えていく、その材料が非常に豊富にあることだと思います。今まではそれを大学の中でバラバラに考えていましたが、今後それをどう結びつけ、統合化していくかが重要です。細分化された学問を結びつけるのが「知の構造化」だとすれば、それをベースに社

総長室総括委員会とは？

総長室の下に設置された、室、本部、機構といった組織をまとめる、本部における教授会のような役割を担っています。
総長室総括委員会HP: <http://cirp.u-tokyo.ac.jp>

会に発信していくのがこのセンターの役割ですし、それができるのは、やはり東京大学の強みなのではないかと思えます。



Q. 学外との連携の予定は？

森田 海外の機関との連携はまだこれからですが、いくつかアイデアはあります。また、国内の連携は、積極的に進めたいと思っており、既に多方面から反応もあります。省庁や企業、大学、NPO、マスメディアなど、関心を持っている方々とのネットワークを作っていく予定です。私たちは小さな組織ですが、色々な分野の人たちとのディスカッションを通して視野を広げていき、そこから様々なものを取り出して結びつける場所を作りたいと思っています。

Q. 今後のイベントは？

森田 11月14日(金)に医学部鉄門講堂において、設立記念フォーラムを開催します。フォーラムでは、最初に総長から政策ビジョン研究センターに対するお考えや、期待される役割などについてお話ししていただきます。そして、私がセンターの具体的な活動内容や組織についてご紹介した後、いくつかの研究ユニットの先生方からそれぞれの研究テーマについてお話ししていただくという企画になっています。詳しくは下記センターのホームページをご覧ください。皆様のご参加をお待ちしております。

Q. 今後の抱負は？

森田 まだセンターが誕生したばかりで、どういう形で具体的に政策提言をしていくかは、これからの課題ですが、大学ならではの視点で日本の将来を見据え、客観的なデータに基づき、どういった選択肢があるのかということ発信できればと思っています。

例えば、私たち研究者が研究をする際、様々な規制の壁にぶつかることがあります。これらの規制の中には現状にそぐわないものも多くあるため、大学で生産された知的財産が国際競争の中で活かされなかったり、新しい研究が進まないということがあります。もちろん一定の規制は必要ですが、安全性が確認されたものについての規制緩和などの提案は、大学しかできないことであり、科学技術の振興政策の一つであると思っています。こういった分野の政策提言にも力を入れていきたいと考えています。

私たちが出した政策提言を基に、日本国内に限らず、色々なところで活発な議論が展開されることを期待しています。また、皆さんに取り上げていただけるようなポリシーペーパーを作り、情報発信していくことを目指しています。(インタビュー：神谷・長田)

● 関連ホームページ ●

政策ビジョン研究センター <http://pari.u-tokyo.ac.jp>

問い合わせ先：本部研究機構等支援グループ（内線20484）

平成20年度 第1回アドバイザリーボードミーティング開催

第3期スタート 大学・大学院での基礎学力の充実を

9月3日(水)、平成20年度第1回産学連携協議会アドバイザリーボードミーティング(ABM)が本部棟12階大会議室で開催されました。ABMは、本学理事と産業界アドバイザーが産学連携について意見交換を行う場で、今年度で3期目に入ります。同日の会議では、産業界側から“基礎学力の向上、人材の育成、社会への情報発信”などの要望がありました。また、サブプライムローン問題を例に、小宮山宏総長からは新しく発生する社会現象などの研究を若手研究者と学生で進める方策も提案されるなど、基礎学力の充実と社会に貢献する研究のあり方について活発な議論が交わされました。

会議では、小宮山総長の挨拶、藤田隆史産学連携本部長によるこれまでの活動報告の後、佃和夫氏(三菱重工業(株)会長)、氏家純一氏(野村ホールディングス(株)会長)から「東京大学への期待」と題して提案がありました。佃氏は、研究、基礎学力の向上、社会のオピニオンリーダーとしての情報発信の3点を挙げ、氏家氏も基礎学力の徹底、現実社会に存在する様々な問題の理論的研究の必要性を指摘されました。

さらに、これまでのABMの成果としてスタートするEMP(Executive Management Program・10月開講)について山田興一理事が報告し、産業界から大きな期待が寄せられました。



小宮山総長の説明を熱心に聴く産業界アドバイザー。写真左奥から氏家氏、佃氏、西山氏。

第3期ABMメンバー

【産業界アドバイザー】佐々木幹夫氏(三菱商事(株)取締役会長)、榊原定征氏(東レ(株)代表取締役社長)、古川一夫氏(日立製作所 代表執行役執行役社長)、佃和夫氏(三菱重工業(株)取締役会長)、氏家純一氏(野村ホールディングス(株)取締役会長)、西山徹氏(味の素(株)技術特別顧問)

【東京大学】小宮山宏総長、岡村定矩理事・副学長、西尾茂文理事・副学長、濱田純一理事・副学長、浅島誠理事・副学長、高橋宏志理事・副学長、山田興一理事、平尾公彦副学長、藤田隆史産学連携本部長



ABM後の懇親会で。小宮山総長、山田理事と産業界アドバイザー

第11回科学技術交流フォーラム開催

~CO2回収・貯留技術の可能性をテーマに~

8月27日(水)13時30分より山上会館2階大会議室にて、第11回科学技術交流フォーラム「CCS~温暖化対策の産業界における切り札と成り得るか~」が開催され、約140名が参加しました。今回は、温暖化対策、エネルギー安全保障の両面から有望な技術として注目を集めているCCS(二酸化炭素の回収・貯留技術)の実用化の可能性をテーマに、3名の講師の方が講演されました。

フォーラムでは、藤田隆史産学連携本部長、山田興一産学連携担当理事の挨拶に続き、村岡元司氏(株NTTデータ経営研究所、社会・環境戦略コンサルティング本部パートナー)が、「欧米のCCSに関する主要政策と産業界の動向について」と題して講演。サービス供給型のビジネスが増えつつある日本の現状を踏まえた、ビジネスの方向性にも言及されました。続いて研究者側から、藤井康正氏(大学院工学系研究科教授)が「CCSのエネルギーモデル評価とシナリオ策定について」と題して、さまざまなシナリオモデルをもとにCCSの問題点と課題を提起されました。大隅多加志氏(財団法人電力中央研究所 客員研究員)は、「CCSに係わるロンドン条約の改訂と国内法制定について」と題して講演。日本国内でのCCS実施には、国内合意を得たうえで大きなシナリオの作成が必要と指摘されました。

フォーラム後には、同会館1階ラウンジで交流会が行われ、多数の参加者でにぎわいました。



村岡元司氏 藤井康正氏 大隅多加志氏

【開催案内】第12回科学技術フォーラム「食糧問題 課題と産学官の果たす役割(仮題)」

今年度第3回目となる科学技術フォーラムは、食糧問題をとりあげます。食糧とこれに関わる地球環境変化から育種、農業再生にわたる広い大学の取り組みを紹介し、丸紅経済研究所の柴田明夫所長(日経新聞出版社刊「食糧争奪」の著者)より特別講演をいただきます。

日程:11月12日(水)13:30~17:40(終了後、交流会)

会場:山上会館2階大会議室

参加費:無料(交流会3,000円)

※事前登録が必要です。下記URLよりお申し込みください。

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/kyogikai/forum>

連絡先:産学連携本部(本部産学連携グループ) 電話:内線22857
(外線03-5841-2857)ホームページ:<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DUCR

検索

DUCR
Division of University Corporate Relations
The University of Tokyo



先入観から解き放たれるには？

渡邊雄一郎

総合文化研究科 教授

科学技術インタープリター養成プログラム担当

昨今、食の問題に関して、非常に残念なニュースが続く。しかし、我々はただ不安をかきたてられる一方ではいけない。ここではヒューマンエラーといった部分ではなく、科学リテラシーに関連する部分についてかんがえてみよう。

科学的に新しいものが生み出された際には、市民はとかく慎重になるが、一様にその反応が示されているだろうか。サプリ、トクホとよばれるものに対しては、遺伝子組換え食品に対するほどの警戒心はないような気がする。実際、遺伝子組換え食品にくだされるような厳しい審査過程はない。法律で指定されていないからというのが理由。科学的にみると非常に抜けを感じる部分である。最近、イソフラボンに対しては過剰な摂取を慎むように勧告が出されたのは記憶に新しい。

イソフラボンにはダイズなどの多く含まれる天然成分でもあるために、警戒もされていなかった。でも天然成分が安全ということは、科学的に根拠は全くない。そもそも植物は簡単に動物に食べられまいとして、苦みなどの天然成分を可食部にたくわえるのである。それを人類は農業革命以来、食べやすい、おいしいといった性質をもった植物を選び、大事に育てることを学んできた。おいしいということは大事であるが、嫌な成分を含まない植物は他の生物にとってもおいしいはずである。すると虫害、病害に対しては弱くなる。なのに、現在の消費者は見かけの悪いもの、虫の食べたものがあるような野菜を買うことを避ける。体の弱くなった作物を、消費者が手に取るような形できれいにそだてるにはどうするか。だからといって農薬などを使うのはままならないといった要求も起こる。よく考えると、矛盾しているのである。

技術、あるいはあらたな成分、製品には新しく売り込む部分があろう。それをベネフィットとする。と同時に従来のものに比べて問題となる部分、リスクもあろう。何事にも100%安全、あるいは安心ということはない。どれだけリスクがあるか。それを凌駕するだけのベネフィットがどれだけか。従来のものを越えてあれば、採択する価値がはじめて生まれる。

天然成分がいつも人工成分より安全ということはない。アフラトキシンは、分子生物学の教科書にも出てくるくらい非常に強い発がん性物質である。ある種のカビがつくる立派な天然成分である。農薬よりこの成分で汚染した米の方が怖い。こういった状況が的確に判断されて、真の食の安全が早期に保障されることを祈っている。

★科学技術インタープリター養成プログラム

URL:<http://park.its.u-tokyo.ac.jp/STITP/>



ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信～ No. 11



東大ナビとは？

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。

是非、東大ナビをご活用ください！



イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jpに空メール送信！

- この記事のQRコードから
- mail@utnav.jp宛てにメール送信
- 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ
- ※携帯電話・PCどちらからも登録可能



返信メールから登録画面に入力！

- ご所属
- 性別・年齢など



登録完了！

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET！



イベントを宣伝したい方

携帯・PCサイトで申し込めます

- <http://utnav.jp/>にアクセス
- イベント掲載フォームから送信！
- 追ってスタッフよりご連絡致します教育企画室TREEオフィスまで！
- 内線；27823（重田）
- メール；info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
- オフィス；本郷キャンパス 第二本部棟401号室

コミュニケーションセンターだより No.52

■店内入り口のディスプレイが新しくなりました。

毎月行っている恒例のUTCCミーティング。学生スタッフが積極的にアイデアを出し合ったり、より素敵なお店にするにはどうしたら良いかを熱く話し合っています。その中で今回は、入り口のディスプレイを大きく変えてみよう、と意見が一致。今までDVDを流していた場所に大きなガラスケースを置き、プレゼントにおすすめの商品を中心にディスプレイしました。今まではプレゼントに何を贈ろうか悩まされていた方も多くいらっしゃいましたが、入り口のディスプレイを変えてからは、「プレゼントの参考になった」とのお声もちらほら聞こえてきました。小さな店内ですが、まだまだ挑戦したことのないアイデアがこれからもどんどん出てくるのではと、スタッフ一同わくわくしています。

リニューアルした店内を是非一度ご覧下さい。

ディスプレイ全体



↓ディスプレイ商品



■UTCCスタッフを紹介します!!



理学系研究科生物科学専攻
修士1年
上月 直之

(担当：コミュニケーションセンター 山下)

はじめまして。UTCCスタッフの上
月です。今回は僕の一押し商品で
ある「歴史クリアファイル(松の栄)」
を紹介します。1827年(文政10年)
に、加賀藩に嫁入りする溶姫の行
列が色鮮やかに描かれています。
東大のシンボルである赤門、今日
では東大生だけでなく、多くの方
が通っていますが、溶姫は約180年
前にはどんな思いでくぐったので
しょうか。明日からちょっと立ち止
まってしまいそうですね。

UTCCではこのような東大の所蔵
する貴重な史料を活かしたグッズも
取り揃えております。みなさんのご
来店、心よりお待ちしております!!



東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

The University of Tokyo

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30
電話：03-5841-1039
http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp

ワタシのオシゴト / 第32回

Rings around the UT

本部総務グループ 係長

山本 哲也 さん

ネコとクルマが活力源



デスクにて

みなさんこんにちは。平成19年7月にこちらに異動し、あつと言う間に1年が経過しました。所掌事項としましては、「大学全体の業務の総括」「学内外との連絡調整」「式典・行事の企画運営」などが主な担当です。他にもいろんな業務があり、それぞれの事案に対して日々精進しているところです。

着任してからの式典・行事に関して主なものと言えば、創立130周年記念式典、卒業式・学位記授与式、入学式など盛りだくさんですが、皆様のご協力のもと、いずれも滞りなく終えることが出来ました。

帰宅すると、愛猫が毎日の疲れを癒してくれ、休日は好きなクルマと戯れて活力をたくわえています。

当チームにて所掌している業務は、各部局様のご協力がなくては実施できないものばかりで、いつも皆様には本当にお世話になりっぱなしで感謝の念にたえません。

これからも、皆様のご協力を得つつ、愛される総務チームを目指し続けたいと思っています。



職場の仲間と

得意ワザ：車のカスタマイズ（合法の範囲内です）

自分の性格：アバウト

次回執筆者のご指名：瀬戸美香子さん

次回執筆者との関係：とつてもチャーミングな後任者

次回執筆者の紹介：明るく真面目でしっかり者



教育学部附属中等教育学校で2008年度「体験授業」行われる

8月30日(土)9時～11時30分まで教育学部附属中等教育学校において、2008年度の体験授業が行われた。2006年度からはじまり、今年は3回目の開催で、620名が応募し、小学5・6年生282名が附属の授業を体験した。

開校式で、南風原朝和学校長が挨拶を述べ、つづいて、児童は2時間の授業を受けた。国語「ひらがな」、社会「矢じりを作ろう」、数学1「立方体をさぐる」、数学2「計算のしくみを考える」、理科1「犯人を探せ」、理科2「生物の構造」、英語「英語のリズムを楽しもう」、技術「木材の不思議」、情報「パソコンで模型車を動かそう」、体育「チャレンジゲーム」、音楽「音の不思議」、家庭「砂糖の不思議」の合計12の講座が開かれた。参加した子どもたちは、「視点を変えて砂糖をみることで、その性質や使われ方を調べたり話し

あったりして体験授業を受けてよかった」、「いつもよくやる計算をここまで深く考えたことはなかったので勉強になりました」、「今知っている知識を少しだけ発展しているところが良かった」などの感想を述べてくれた。

保護者は、学校説明会に参加した。学校の概要は、三橋俊夫後期課程副校長が、教育活動全体の説明を越智豊教務部長が、入試については、村石幸正前期課程副校長が、それぞれ説明した。その後、学校生活を紹介するビデオを放映した。つづいて、「在校生が語る東大附属」というテーマの話を本校生徒が行った。

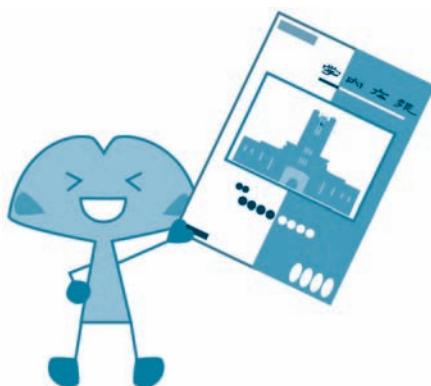
参加した保護者の感想では、「自主性を重んじ、自ら学ぶ力を養う学校で、卒業研究を子どもが楽しみにしています」、「在校生の話し方が、しっかりしてとても良かった」、「生徒が自主的に活動し、おさえつけた教育をしていないと思われる」といったものがあつた。



授業の様子



「在校生が語る東大附属」の様子





教育学部附属中等教育学校1年生の富浦臨海学校が実施される

7月31日(木)～8月3日(日)の3泊4日の日程で、教育学部附属中等教育学校1年生の富浦臨海学校が実施された。この富浦臨海学校に向け学校では事前に水泳訓練が行われた。水泳訓練は、通常の体育の授業で行われたほかに夏休み中にも2日間行われ、富浦での遠泳に向け初級者から上級者までコース別に行なわれた。体育科や水泳部の顧問、水泳指導担当教員が連日猛暑の中、生徒一人ひとりに丁寧な水泳指導を行った。また、水泳部の上級生たちが、安全に配慮しながら優しく1年生の水泳訓練に協力してくれた。こうした異年齢集団の取り組みから中等教育学校の良さが感じられた。

臨海学校初日から規則正しい充実した水泳訓練をこなした3日目、遠泳の日になると、2日間の水泳訓練の成果により、上級グループの人数が増えてきた。遠泳が始まると、きれいにそろって沖の方へと進んでいった。ゆったりと力強く泳いでいる姿はとても頼もしく見えた。遠泳参加者は全員無事に遠泳を終えることができた。遠泳グループ以外の生徒も泳力に応じて訓練を受け一生懸命に泳いだ。学校での訓練のときよりも生徒達は泳ぎが上手になり自信をつけたように見えた。

3泊4日の富浦臨海学校を終え、帰る頃にはすっかり富浦での生活にも慣れ生徒たちは名残惜しそうであった。都会の生活を離れ、海に囲まれた宿舎での生活、遠泳の経験は1年生にとって、とても貴重な経験となったようであった。



遠泳の様子

＝ 特集テーマ&執筆部署募集告知＝

特集の記事を執筆してみませんか？

学内広報では巻頭特集の記事テーマとその執筆部署を募集しています。学内への周知を図るためのツールとして特集はとても効果的です。皆さんの部署でも、ぜひ特集の記事を執筆してみませんか？

1. 制作方法

① テーマの選定

全学の教職員を読者対象とするテーマを選定することになっています。まずは、本部広報グループに気軽にご相談ください。特集に馴染まないテーマでない限り、対応します。

(締切日の3週間前位までに一度ご相談ください)

② 内容・構成の決定

テーマが決まったら執筆部署と学内広報編集スタッフ(以下、編集スタッフ)が打ち合わせをしてページの内容を決めていきます。見開き2ページをひとつの単位とします。内容が盛りだくさんの場合は4ページ、または6ページで構成することもあります。

③ 原稿の執筆

決定した構成に合わせて執筆部署に原稿を書いていただきます。字数等は編集スタッフが提示します。原稿はWordファイルでご制作下さい。

④ ビジュアル要素の提供

特集に盛り込む写真・図・イラストを執筆部署から提供していただきます。手持ちの写真がない場合は編集スタッフが撮影にうかがいます。

(学外または他部署のホームページ等から写真・図・イラスト等を転用する場合は著作権に十分留意し、必ず先方の許諾を得てからご使用ください)

⑤ デザイン

お書きいただいた原稿、ご提供いただいた写真・図等を素材にして、編集スタッフがページデザインを作ります。もちろん、執筆部署でデザインを作っていただいてもかまいません。

⑥ 校正

デザインしたページイメージをお送りしますので、主に文字校正を行なっていただきます。

⑦ 完成

刷り上がった学内広報は、執筆部署に多めに配布します。

2. 締切日

あらかじめ、こちらから期日を申しますので、ご協力をお願いします。通常の学内広報の切日の**数日前**を原稿締切日とします。

3. 問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム
TEL: 03-3811-3393 内線22031
E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

INFORMATION

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA)

「データ統合・解析システム (DIAS)」平成20年度中間報告会

地球観測データ統融合連携研究機構では、以下のとおり国家基幹技術「海洋地球観測探査システム」の基幹要素である「データ統合・解析システム」の平成20年度中間報告会を開催します。多くの方のご来場をお待ちしています。

●日時： 10月29日(水) 13:00～17:45

●場所： 武田先端知ビル 武田ホール

●内容：

<趣旨説明>

13:00～小池俊雄 (EDITORIA 機構長)

<利用研究課題の進捗状況報告>

13:05～小池俊雄 (工学系研究科教授)

「地球観測による洪水防衛、水資源有効利用のための高度情報の提供」

13:20～松本淳・増田耕一 (JAMSTEC：海洋研究開発機構)

「アジアモンスーン域における水循環変動の解明とモンスーン変動予測向上への貢献」

13:35～大畑哲夫 (JAMSTEC)

「ユーラシア寒冷圏の水循環変動、大気陸面相互作用の解明と将来予測への貢献」

13:50～沖大幹 (生産技術研究所教授)

「地球温暖化がグローバルな水循環や水資源管理、水圏系生態系、食料生産に及ぼす影響のアセスメントのための地表面環境データベースの構築」

14:05～鷺谷いづみ (農学生命科学研究科教授)

「生物多様性の広域モニタリングの高度化」

14:20～淡路敏之・深澤理郎 (JAMSTEC)

「海洋における熱・水・物質循環過程の診断と気候変動に対する影響評価ならびに水産資源データとの融合による応用機能開発」

14:35～今須良一 (気候システム研究センター准教授)

「人工衛星データを用いた温室効果気体とエアロゾルの高次解析データベースの構築」

14:50～木本昌秀 (気候システム研究センター教授)

「気候・気象予測情報の高度化」

15:05～溝口勝 (情報学環・学際情報学府教授)・鳥谷

均 (農業環境技術研究所)・二宮正士 (中央農業総合研究センター)

「安全な農作物生産管理技術とトレーサビリティシステムの開発」

15:20～意見交換

15:35～休憩

<システム開発>

15:50～瀧澤隆俊 (JAMSTEC)

「実用化技術開発」

16:05～喜連川優 (生産技術研究所教授)

「統融合コアシステム」

16:20～柴崎亮介 (空間情報科学研究センター長、教授)

「相互流通性支援システム」

<データ投入>

16:35～梅沢一夫 (JAXA)

「衛星観測データ」

16:45～瀧澤隆俊 (JAMSTEC)

「海洋観測データ」

16:55～小池俊雄 (工学系研究科教授)

「陸域・大気研究観測データ/モデル」

17:05～休憩

<まとめ>

17:15～総合討論

17:45 閉会

※プログラムは都合により変更する場合がございます。

●参加費： 無料

●問い合わせ：

地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA)

03-5841-6132 (内線:26132)

editoria@editoria.u-tokyo.ac.jp

<http://www.editoria.u-tokyo.ac.jp/>

学術統合化プロジェクトシンポジウム (ヒト/地球) シンポジウム「我々の未来はどうなるのか」開催のお知らせ

総括プロジェクト機構学術統合化プロジェクトでは、学術統合化プロジェクトシンポジウム (ヒト/地球) シンポジウム「我々の未来はどうなるのか—学術の統合から見えてくる地球と人類の未来を予測する」を次のとおり開催します。多くの方のご来場をお待ちしています。

日時：11月3日 (月・祝) 13:30～17:30

場所：安田講堂

プログラム：

13:30～ 開会挨拶

小宮山 宏 総長

13:40～ 基調講演 1

「“生きていること”を見つめる統合知」

中村 桂子 氏 (JT生命誌研究館館長)

14:20～ 基調講演 2

「気候変動と地球温暖化」

中島 映至 教授 (気候システム研究センター長)

15:15～ 講演

「データ統合による知の創造と公共的利益の創出」

小池 俊雄 教授 (地球観測データ統融合連携研究機構長)

15:30～ 講演

牧野 貴樹 特任助教 (学術統合化プロジェクト (ヒト))

「生命研究のフロンティアを読む—教科書を軸とした学術統合化」

15:45～ 講演

美馬 秀樹 特任准教授 (工学系研究科附属工学教育推進機構)

「進化する教科書—知の構造化と進化のプロセス」

16:00～ パネルディスカッション

中村 桂子 氏

中島 映至 教授

小池 俊雄 教授

高木 利久 教授

(学術統合化プロジェクト (ヒト) リーダー)

秋山 弘子 特任教授 (ジェロントロジー寄付研究部門)

コーディネーター

住 明正 教授

(地球持続戦略研究イニシアティブ・統括ディレクター)

17:00～ 閉会挨拶

平尾 公彦 副学長

昨今の生命科学は著しく進歩している一方で、温暖化問題など地球環境の劣化は予想を超えた速さで進んでいます。こうした中で、細分化された地球研究、生命科学研究いずれもが、再び統合化することを求められているのではないのでしょうか。学術の統合化から見えてくる人類の未来を予測します。

今回のシンポジウムは、学術統合化の名に相応しく多分野にわたる研究者の方々をお迎えします。

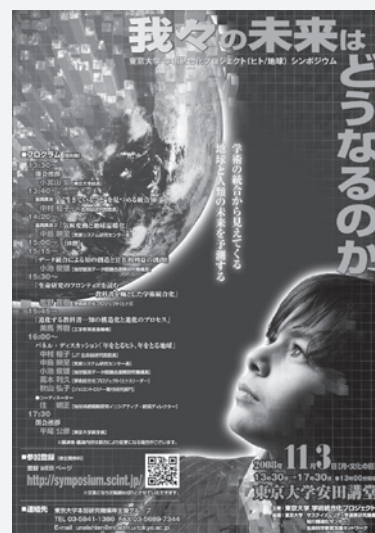
学術統合化プロジェクトシンポジウム・ホームページ (参加登録はこちらからどうぞ)

<http://symposium.scint.jp/>



総括プロジェクト機構・ホームページ

<http://www.dpc.u-tokyo.ac.jp/>



学術統合化シンポジウムポスター

公開研究会「歴史知識学の創成」開催のお知らせ

史料編纂所附属前近代日本史情報国際センターでは、昨年度に引き続き、公開研究会「歴史知識学の創成」を開催します。多くの方々のご参加をお待ちしています。

日時：11月22日 (土) 10:00～17:00

(会場受付 9:30 より)

会場：山上会館

〔プログラム〕

- ・開会挨拶 (10:00)：横山伊徳 (所長・センター長)
- ・研究報告 (10:15 ~ 12:05)：
「研究活動報告」
石川徹也 (教授・研究開発主査)
「史料・画像検索システムの研究」
共同研究プロジェクト (史料編纂所・大日本印刷)
「情報抽出による人物DBの構築研究」
共同研究プロジェクト (史料編纂所・NTTデータ)
「人物史DB構築研究」
赤石美奈 (兼任准教授・大学院工学系研究科)
「コメント」
中川裕志 (情報基盤センター教授)
堀 浩一 (大学院工学系研究科教授)
- ・基調講演 (13:10 ~ 14:00)：
「知識化研究の意義」
松岡資明 (日本経済新聞社編集局文化部編集委員)
- ・研究報告 (14:00 ~ 15:40)：
「鎌倉遺文を対象とする Virtual Laboratory 構築プロジェクト」
遠藤基郎 (准教授)
「翻刻支援エディター」
山田太造 (助教)
「日本古文書ユニオンカタログプロジェクト」
近藤成一 (教授)
- ・討論 (15:40 ~ 17:00)：
「歴史知識学の可能性—何をなすべきか?—」
安永尚志 (国文学研究資料館名誉教授)
柴山 守 (京都大学東南アジア研究所教授)
保立道久 (教授・前所長)
司会：石川徹也
- ・懇親会：
会場 山上会館談話ホール
会費 4000 円

問い合わせ先：

史料編纂所附属前近代日本史情報国際センター
TEL:03 (5841) 8410 FAX:03 (5841) 5956
E-mail : hakoishi@hi.u-tokyo.ac.jp

シンポジウム・講演会

空間情報科学研究センター

2008 年度 空間情報科学研究センター シンポジウム - CSIS DAYS 2008 - のご案内

空間情報科学研究センターでは、12月11日(木)～12日(金)に柏キャンパスにおいて、年次研究発表会 CSIS DAYS 2008 を開催します。従来からの一般公募に

よる研究発表に加え、一昨年度より「全国共同利用研究発表セッション」を設け、共同研究を進めている研究者の方々による研究発表の機会も設けています。空間情報科学研究センターを中心とした空間情報科学に関する共同研究の成果を広く知っていただき、また産官学の連携を促進する研究交流の活発な場に発展することを期待しています。

「地理空間情報活用推進基本法」による基本計画も策定され、地理空間情報の流通、利用、分析など研究・開発への社会からの要請は高まっているように感じます。CSIS DAYS 2008 は、4 回のポスターセッション (各 45 分間) を基本としますが、各セッションの前に、ポスターの概要を 5 分程度で口頭発表する時間も用意します。

昨年度の CSIS DAYS 2007 には、約 200 名が参加しました。今年度も皆様の積極的なご参加をお待ちしています。なお、詳細につきましては、下記のウェブサイトをご覧ください。

<http://www.csis.u-tokyo.ac.jp/csisdays2008/>



お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第 514 (10 月 8 日) 号の発行
——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15 号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。

第 514 号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

深代千之：北京オリンピック陸上

—— 400m リレーメダル獲得の快挙！

栗栖源嗣：高校生のための東京大学オープンキャンパス 2008

岡本拓司：駒場図書館所蔵の掛図

安達裕之：電子化されるプチの『産業実務家』

斎藤正彦：杉浦光夫さんを偲ぶ

足立信彦：麻生建先生を偲ぶ

〈本の棚〉

柴 宜弘：木畑洋一著『イギリス帝国と帝国主義
——比較と関係の視座——』

〈時に沿って〉

中島 峻：物理と駒場とファミコンと

鹿毛利枝子：駒場に来て

鈴木健太郎：駒場に来てから

松田恭幸：駒場で想うこと

〈お知らせ〉

駒場博物館企画展 behind the seen ——アート創作の
舞台裏

第4回東京大学駒場キャンパス技術発表会開催

南米のマンドリン音楽レクチャーコンサート

お知らせ

附属図書館

特別展示会「かわら版・鯨絵にみる江戸・明治 の災害情報—石本コレクションから」の開催

本学地震研究所の所長であった石本巳四雄先生（1893～1940）のコレクションのうち、本図書館が所蔵する江戸～明治期の災害かわら版・鯨絵などの出版物を中心に展示します。石本先生は関東大震災を挟む3年間フランスに留学、帰国後は地震計測機器を考案するなど、地震学の発展に寄与されました。留学先で最先端の科学研究に触れた地震学者が自国の一見科学の対極にあるようなかわら版や鯨絵などの出版物に関心を抱いた理由にはどのようなものがあつたのでしょうか。近代地震学を担う学者のなかで、早くから災害と社会の関係を文化という次元から捉えてみようとする懐の深い理解を持った人物のひとりであつたのかもしれませんが。展示品の数々がみなさんを石本先生の興味のおもむくところへいざないます。

なお、展示で取り上げる災害について最先端の研究成果も併せて紹介します。

〈特別展示〉

期 日：10月24日（金）～11月26日（水）

（土・日・祝日も開催）

時 間：9:00～18:00（11月5日は20:00まで）

場 所：総合図書館3階（入場無料）

〈記念講演会〉

演 題：かわら版・鯨絵にみる江戸・明治の災害情報
—石本コレクションから

日 時：11月5日（水）18:00～19:30

場 所：総合図書館3階大会議室

（入場無料・申込不要）

講 師：北原糸子 神奈川大学教授

お問合せ先：附属図書館情報サービス課・専門員

Tel 03-5841-2640

お知らせ

本部学生支援グループ

SiLR（三四郎池のランドスケープ・リノベーション）主催の「秋の三四郎池ウィーク」が開催されます

SiLR（三四郎池のランドスケープ・リノベーション）では、10月28日（火）から11月3日（月・祝）にかけて、三四郎池（本郷キャンパス育徳園心字池）において「秋の三四郎池ウィーク」を開催します。SiLRは、本学130周年記念の学生企画として実施されているもので、学生と大学が共同で三四郎池に関する調査および整備方針の検討を進めています。「秋の三四郎池ウィーク」期間中は、三四郎池においてSiLRの調査結果をパネル展示するとともに、企画メンバーの案内による「三四郎池ツアー」を実施します。「三四郎池ツアー」では、三四郎池の植物や歴史など、様々なテーマのツアーを行います。期間中はぜひ三四郎池を訪れてみてください。なお、本イベントの詳細については、SiLRのHPをご覧ください。（<http://www.silr.org/>）

SiLRの取り組みについての問い合わせ先：

本部学生支援グループ（内線22513）担当：岡田、渡邊

お知らせ

大学院農学生命科学研究科・農学部

第35回東京大学農学部公開セミナー

大学院農学生命科学研究科・農学部では、以下の要領でセミナーを開催します。無料で、どなたでも参加できます。多くの方のご来場をお待ちしております。

第35回 東京大学農学部公開セミナー

『バイオエネルギーは地球を救うか？』

司 会：生物材料科学専攻 鮫島 正浩 教授

「バイオエタノール生産・利用をめぐる経済問題と国際情勢」

農学国際専攻

鈴木 宣弘 教授

「バイオエタノール生産・利用のための原料作物の確保」

生圏システム学専攻（附属農場） 森田 茂紀 教授

「バイオエタノール生産技術とその周辺を巡る諸問題」

応用生命工学専攻

五十嵐 泰夫 教授

日 時：11月1日（土）13:30～16:45

場 所：東京大学弥生講堂・一条ホール

東京都文京区弥生1-1-1

地下鉄南北線「東大前」下車 徒歩1分

地下鉄千代田線「根津」下車 徒歩7分

対象：一般（どなたでも参加できます）
定員：300名（当日先着順、事前登録不要）
参加費：無料
問合せ先：東京大学農学系総務課 総務チーム
総務・広報情報担当
〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1
電話 03-5841-5484, 8179
E-mail: koho@ofc.a.u-tokyo.ac.jp

※ 受講証を発行いたします。
ご希望の方は、120円切手をご持参の上、当日受付でお
申してください。

主催：大学院農学生命科学研究科・農学部
共催：(財)農学会

お知らせ

情報基盤センター

“留学生向け情報探索ガイダンス”（韓国語・中国語）のお知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では、韓国語・中国語で行う「留学生向け情報探索ガイダンス」を開催します。

内容は、レポート・論文作成に役立つ、データベースを使った図書や雑誌論文の検索実習です。

留学生のみならずのご参加をお待ちしています。

入門的な内容ですので、留学生に限らず、初心者の方のご参加も歓迎します。

本学にご所属であればどなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

●会場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー
(定員12名 予約不要です。直接ご来場ください。)

●日時：

- ・11/5 (水) 15:00～16:00 韓国語コース
- ・11/11 (火) 15:00～16:00 中国語コース

詳細は下記のサイトをご覧ください。

(韓国語)

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/k/training-k.html>

(中国語)

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/c/training-c.html>

●参加費：無料

●問い合わせ：

学術情報リテラシー係

03-5841-2649 (内線：22649)

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

お知らせ

附属図書館

総合図書館備付け図書の推薦について (平成20年度冬学期)

総合図書館では、学生の学習・研究を助け、また教養をより豊かにするために、全学の教員（常勤講師以上）から図書を推薦していただく制度を設けております。

つきましては、下記のとおり図書の推薦をお願いいたします。

1 取りまとめ窓口 各局図書館（室）

2 推薦期限 11月7日（金）

なお、その他の図書の推薦は随時受け付けます。

3 推薦図書の範囲

- (1) 講義に密着した図書は、本郷キャンパスの講義を対象としています。
- (2) その他、学生の教養書としてふさわしいものをご推薦ください。ただし、雑誌および学生にとってあまりに高度な専門図書、医学・薬学臨床系図書は除いてください。

4 推薦方法 総合図書館備付け図書推薦要領によります。 ※推薦要領は、各局図書館（室）に備付けています。

※附属図書館 Web サイト (<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/>) 「ニュース」にある「総合図書館備付け図書の推薦受付について」もご参照ください。

お知らせ

情報基盤センター

“情報探索ガイダンス” 各種コース実施のお知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では、レポート・論文作成や学習・研究に役立つ“情報探索ガイダンス”各種コースを実施しています。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

●会場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー
(定員12名 予約不要です。直接ご来場ください。)

●日程・コース概要：

<データベースユーザトレーニング>

■ 11/14 (金) 15:00 ~ 16:00 EBSCOhost特別コース
(※このコースは今回限定です。)

EBSCOhost では、経済学分野の Business Source Elite、EconLit、社会学分野の SocINDEX、医学分野の MEDLINE、看護学分野の CINAHL など、様々なデータベースが利用できます。このたび EBSCOhost のリニューアルに伴い、EBSCO より講師を招いて特別コースを開催します。ぜひこの機会にご参加ください。

■ 11/26 (水) 15:00 ~ 16:30

Web of Science + EndNote Web コース

Web of Science は、全分野の主要な学術雑誌に掲載された論文のデータベースです。通常のキーワード検索に加え、引用文献をキーにした検索も可能です。ガイダンスの後半では、文献管理ツール EndNote Web の利用方法も説明します。

<テーマ別ガイダンス>

■ 11/12 (水) 15:00 ~ 16:00 日本の論文を探すには？

日本の論文を探すときの代表的なデータベースである CiNii (サイニイ) の使い方を中心に解説します。

■ 11/13 (木) 15:00 ~ 16:00 電子ジャーナルを利用するには？

代表的な出版社の電子ジャーナルサイトを例にとって実際の利用方法を解説します。“UT Article Link”を使って、データベース検索結果から電子ジャーナルへアクセスする方法も紹介します。

■ 11/18 (火) 13:30 ~ 14:30 文献検索早わかりコース

図書や電子ジャーナル、雑誌論文、新聞記事など、各種の文献検索方法をまとめてコンパクトに解説します。

■ 11/19 (水) 11:00 ~ 12:00 自宅から検索するには？

学内・学外を問わず利用できる無料公開のデータベース・電子ジャーナルを紹介します。また、通常は学内限定のデータベース・電子ジャーナルでも ECCS アカウントや個別手続きにより学外からも利用できるものがありますので、その紹介をします。

< Database User Training (English Session) >

英語によるガイダンスは、以下のとおり電子ジャーナルコースを実施します。

■ Electronic Journals Course (60 minutes)

11/28 (Fri.) 15:00 ~ 16:00

This course covers the fundamental aspects involved when consulting electronic journals.

You will also learn how to access e-journals directly from the search results by using the "UT Article Link" functions.

No advance reservation is required.

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/e/training-e.html>

●参加費：無料

●問い合わせ：

学術情報リテラシー係

03-5841-2649 (内線：22649)

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

お知らせ

生産技術研究所

平成 20 年度千葉実験所公開のご案内

生産技術研究所附属千葉実験所は、駒場Ⅱキャンパスでは実施が難しい大規模な実験的研究やフィールドテストのための附属施設です。恒例となりました実験所公開を 11 月 14 日 (金) に予定しています。進展の著しい研究活動と設備の充実した研究実験棟等を是非この機会にご覧ください。

日時：11 月 14 日 (金) 10:00 ~ 16:00

場所：生産技術研究所附属千葉実験所

JR 総武線 西千葉駅北口下車 約 250m

駒場Ⅱキャンパスより大型バス (東武観光) が出ます。

ご利用の方は下記へお申し込みください。

行き 正門正面 13 号館前 (時計台の建物)

9:30 出発

帰り 千葉実験所事務棟前

16:00 出発予定

申込先 第 2 部 林 昌奎

(内線：56208、rheem@iis.u-tokyo.ac.jp)

特別講演

◆資源・エネルギー・環境問題への取り組み

エネルギー工学連携研究センター、
サステイナブル材料国際研究センター

公開テーマと研究室

- ◆近年の地震被害－地盤に刻まれた情報の解説－
小長井・ヨハンソン研究室
- ◆地震による建物の破壊過程を測る
中埜研究室
- ◆水中を自在に泳ぎ回る自律型海中ロボット
浦研究室
- ◆突発的的巨大波浪、外洋型超高速船、浮消波堤
木下研究室
- ◆“超”を極める射出成形加工－最新研究成果の公開－
横井研究室
- ◆プロペラファン空力騒音の予測
加藤（千）研究室
- ◆ビークルシステムダイナミクスの展開／車内の快適性評価
須田研究室
- ◆位置エネルギーを活用した省エネ型都市交通システム
須田・中野研究室
- ◆千葉試験線を活用した鉄道技術に関する包括的研究
鉄道技術推進リサーチユニット 研究プロジェクト
- ◆熱間加工材質変化に関する研究
柳本研究室
- ◆マイクロ波ドップラーレーダによる海洋波浪観測
林研究室
- ◆沖合沈下式養殖システム
北澤・木下研究室
- ◆すぐに充電できる電気自動車 C-COMS を体験しよう！
堀研究室
- ◆特殊電子ビーム溶解装置を用いたシリコンスクラップの高度再利用技術の開発
前田研究室
- ◆持続可能なバイオマス利活用システム
迫田・望月研究室
- ◆コンクリート構造物の安全性・耐久性確保のための非破壊検査と補修
岸・加藤（佳）研究室
- ◆ホワイト・ライノとミニ・ライノ
藤井（明）・川口研究室
- ◆新しい免震構造システムの開発
川口研究室
- ◆次世代空調システムの開発
加藤（信）・大岡研究室
- ◆バイオマス物流システムの開発
野城研究室
- ◆剛な一体型壁面を有する補強土擁壁工法の耐震性
古関研究室
- ◆水の知（Part II）
沖・鼎研究室
- ◆伝統木造建築から高層木造建築へ
腰原研究室
- ◆サステイナブル ITS の展開研究
先進モビリティ連携研究センター（ITSセンター）

お知らせ

大学院理学系研究科・理学部

第 61 回小石川植物園市民セミナーのご案内

小石川植物園後援会が主催する第 61 回小石川植物園市民セミナーが下記の通り開かれます。今回は、理化学研究所植物科学研究センターの出村拓博士による、樹木のバイオテクノロジーに関する講演です。最先端の植物科学研究に気軽に触れられる、絶好の機会です。本学関係者に限らず、どなたでも参加できます。どうぞ皆様お誘い合わせの上、是非ご参加下さいませよう、ご案内申し上げます。

講師：出村拓（理化学研究所植物科学研究センター）
演題：「地球を救うスーパー樹木の開発－植物バイオテクノロジーへの期待－」

日時：11 月 15 日（土）13:00～15:00

場所：理学系研究科附属植物園本園（小石川植物園）
柴田記念館

参加費：無料（但し、一般の方は入園料が必要です）

参加申込方法：11 月 10 日（月）までに往復葉書または電子メールにて後援会までお申し込み下さい。返信葉書ないし返信メールが招待状となります。なお参加ご希望多数の際は、お申し込み順に従い受付が締め切られることがあります。悪しからずご了承下さい。

主催・参加申込先：〒112-0001 文京区白山 3-7-1
東京大学大学院理学系研究科附属植物園内
小石川植物園後援会
koishikawa-koenkai@koishikawa.gr.jp

問い合わせ先：理学系研究科附属植物園
杉山宗隆准教授（03-3814-0368）

お知らせ

気候システム研究センター

一般公開講座 2008 「雲－気候を決める千両役者－」

気候システム研究センターでは、一般公開講座「雲－気候を決める千両役者－」を開催します。本講座では地球気候における雲の役割について、人工衛星や航空機による観測、スーパーコンピュータを用いた数値シミュレーションなど最新の知見をわかりやすく紹介します。雲や台風、気候に関心のある方は、ぜひお気軽にご参加ください。

【日時】11 月 25 日（火）

【会場】本郷キャンパス 安田講堂

【プログラム】

開場 13:40～14:30

開会 14:30 ~ 14:40

気候システム研究センター長・教授 中島映至

第1部 14:40 ~ 16:10 講演会

「宇宙から観る雲と雨」

気候システム研究センター教授 高菦緑

「台風、その巨大な雲の渦を科学する」

気象庁気象研究所台風研究部第2研究室長 中澤哲夫

「雲と気候—スーパーコンピュータで謎を解く—」

気候システム研究センター准教授 佐藤正樹

第2部 16:30 ~ 17:30 パネルディスカッション

司会 気候システム研究センター教授 木本昌秀

パネリスト 高菦緑・中澤哲夫・佐藤正樹

【参加費】 無料

【定員】 500人

【お申込】

(1) ウェブページから

<http://www.ccsr.u-tokyo.ac.jp/~k-koza/index.html> にアクセスし、必要事項を入力して下さい。

(2) FAXにて (11月18日(火) 必着)

以下の番号に、住所、氏名、所属(役職)、電話番号、FAX番号、メールアドレスの情報をFAXでお送り下さい。

FAX番号: 04-7136-4375 (一般公開講座「雲」係)

(3) 往復はがきにて (11月18日(火) 必着)

往復はがきの返信部分に住所、氏名、所属(役職)、電話番号、メールアドレスを記入し、下記の宛先まで郵送して下さい。

宛先: 〒277-8568 千葉県柏市柏の葉5-1-5 総合研究棟 204号室 一般公開講座「雲」係

※会場の都合により、定員に達した時点で受付を終了させていただきます。

※お知らせ頂く個人情報は、本件に関する諸連絡以外には使用しません。ただし、今後気候システム研究センターが主催するイベントの情報をお送りさせて頂く場合があります。

【お問合せ先】

気候システム研究センター 担当: 松崎

電話: 04-7136-4372

FAX: 04-7136-4375

E-mail: megumi@ccsr.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

大学院農学生命科学研究科・農学部

千葉演習林 紅葉の猪ノ川溪谷 特別ガイドのご案内

大学院農学生命科学研究科附属演習林・千葉演習林では春の新緑と秋の紅葉の時期に猪ノ川溪谷の一般公開を行っています。特に秋の紅葉はすばらしく、最近では毎年1万人近い方々がお見えになります。

今年の秋の一般公開は11月22~24、29、30日の土日祝日に行われます。特に本学の教職員とそのご家族を対象として、演習林職員による特別ガイドを以下の要領で行います。森林や研究の話聞きながら、紅葉に染まる溪谷を散策しに来ませんか。皆様お誘い合わせの上ぜひご参加ください。

日 時: 11月29日(土) 10:20 ~ 16:00 頃

集合解散: JR 久留里線 上総亀山駅前 (千葉県君津市)

持ち物: 昼食、飲み物、帽子、敷物、防寒具など

参加費: 無料

定 員: 先着 50名

雨天時: 小雨決行です。荒天により中止する場合は前日まで連絡します。当日、JR久留里線が運休した場合も中止とさせていただきます。

ご注意：平坦な道ですが往復12kmほど歩きます。はき慣れた靴でおいで下さい。
集合場所近辺にはコンビニ等の店舗がありません。

申込方法：なるべく11月4日（火）までに参加者氏名・代表者の連絡先（所属・電話・E-mail等）を下記へお知らせ下さい。直接来ていただいても参加できますが、中止の連絡はできませんので、遅くとも11月27日（木）までご連絡下さるようお願いいたします。

お申し込み・お問い合わせ先

農学生命科学研究科附属演習林研究部 相川
aikawa@uf.a.u-tokyo.ac.jp
内線 28600（直通 03-5841-8600）

参考（交通経路）

- 新宿発 7:50（JR 特急新宿さざなみ）－木更津着 9:09
木更津発 9:14（JR 久留里線）－上総亀山着 10:15
- 千葉発 8:21（JR 内房線）－木更津着 9:03 木更津発 9:14（JR 久留里線）－上総亀山着 10:15
- 川崎・横浜・東京・新宿・品川から木更津へのアクアライン経由高速バスもあります。



昨年的一般公開の様子

お知らせ

大学院理学系研究科・理学部

東大理学部で考える女子高校生の未来

PART 1 12月14日（日）10:00～13:30（9:30開場）
第5回高校生のためのサイエンスカフェ本郷
「女子高校生のためのサイエンスカフェ本郷」

女子高校生の皆さん、東大理学部で若手研究者による最先端の研究の話聞き、大学院生とランチをしながら気軽にお話ししてみませんか？大学生活、研究のこと、みなさんの質問になんでもお答えします！当日は研究室見学も予定しています。ぜひご参加ください。

講演：「銀河考古学 - 星の化学組成が語る宇宙の歴史 - 」

講演者：小林千晶（オーストラリア国立大学ストロムロ主任研究員）

専門分野：天文学・銀河進化論

対象：女子高校生

定員：50名 参加費無料

PART 2 12月14日（日）14:30～17:00（14:00開場）
「理学ってこんなにおもしろい！—理学部で将来を考える親子参加のシンポジウム—」

東京大学理学部・理学系研究科の現役女子学生と女性教員が、日々サイエンスに魅力を感じ、生き生きと学び研究している様子をお伝えし、大学生活や理学部の授業、将来の進路等についてみなさんからのご質問に率直にお答えします。

プログラム：

挨拶：山本 正幸（理学系研究科長）

「理学の未来を切り拓く女子学生」

野中 勝（理学系研究科男女共同参画委員長）

先輩の紹介：「私が理学を選んだ理由」

西山枝里（理学部 化学科 学部4年）

松井千尋（理学系研究科 物理学専攻 修士課程2年）

小寺千絵（理学系研究科 生物科学専攻 博士課程1年）

現役教員の紹介：「自然科学の魅力と私が来た道」

真行寺千佳子（理学系研究科 生物科学専攻 准教授）

パネルディスカッション：

「理学を思いっきり楽しもう！大学生活とその後の進路」
会場からの質問をもとにみなさんと一緒に考えます。

対象：女子高校生の保護者の方、先生、女子高校生（保護者の方あるいは生徒さん、どちらかだけでもお申し込みいただけます。また女子中学生、保護者の方にもご参加いただけます。）

定員：100名 参加費無料

主催：東京大学大学院理学系研究科・理学部 広報委員会・男女共同参画委員会

問い合わせ先：東京大学大学院理学系研究科・理学部広報室 電話：03-5841-7585

E-mail: kouhou@adm.s.u-tokyo.ac.jp

会場：本郷キャンパス 理学部1号館2階小柴ホール

PART 1（午前）あるいはPART 2（午後）のみのご参加も可能です。

締切：11月16日（日）必着 応募人数を超過した場合は抽選とさせていただきます。

申し込み：詳細は次のURLからご覧ください。

<http://www.s.u-tokyo.ac.jp/girls08>

	氏名	異動内容	旧（現）職等
(退職)			
20.9.20	SAALER SVEN TORSTEN	辞職	教養学部附属教養教育開発機構准教授
20.9.30	森下 悦生	辞職（宇都宮大学大学院工学研究科教授）	大学院工学系研究科教授
20.9.30	唯 美津木	辞職（自然科学研究機構分子科学研究所准教授）	大学院理学系研究科准教授
20.9.30	山根 克	辞職	大学院情報理工学系研究科准教授
20.9.30	河合 正弘	辞職	社会科学研究所教授
20.9.30	宮地 弘幸	辞職（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授）	分子細胞生物学研究所准教授
(採用)			
20.10.1	橋爪 隆	大学院法学政治学研究科准教授	神戸大学大学院法学研究科教授
20.10.1	渋谷 健司	大学院医学系研究科教授	
20.10.1	岩月 純一	大学院総合文化研究科准教授	一橋大学大学院言語社会研究科准教授
20.10.1	和田 毅	大学院総合文化研究科准教授	
20.10.1	橋本 鈺市	大学院教育学研究科准教授	東北大学大学院教育学研究科准教授
20.10.1	穴澤 活郎	大学院新領域創成科学研究科准教授	鹿児島大学理学部准教授
20.10.1	池内 恵	先端科学技術研究センター准教授	人間文化研究機構国際日本文化研究センター准教授
(昇任)			
20.10.1	福島 智	先端科学技術研究センター教授	先端科学技術研究センター准教授
(配置換)			
20.10.1	KARLIN JASON GREGORY	大学院情報学環准教授	社会科学研究所附属日本社会研究情報センター准教授
20.10.1	ROGER DALE SMITH	大学院情報学環准教授	東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター准教授

※ 退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。
 東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

平成20年度 学内広報 発行スケジュール

号数	原稿〆切	発行日	配布
1379	10月 29日(水)	11月 14日(金)	11月 20日(木)
1380	学生生活実態調査号		
1381	11月 26日(水)	12月 12日(金)	12月 18日(木)
1382	1月 7日(水)	1月 26日(月)	1月 30日(金)
1383	1月 29日(木)	2月 16日(月)	2月 20日(金)
1384	2月 25日(水)	3月 13日(金)	3月 19日(木)

学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。

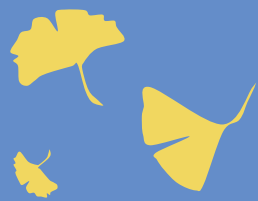
http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html

【東京大学ホームページ】→【右下の学内広報アイコンをクリック】

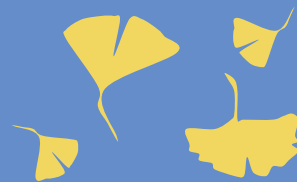


問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム TEL:03-3811-3393 内線22031 E-mail:kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



卒業生と大学をつなぐ 第7回



東京大学ホームカミングデー

日時: 11月15日(土) 午前10時～午後5時

場所: 本郷キャンパス・駒場キャンパス

ホームカミングデーは卒業生に久しぶりにキャンパスを訪れていただき
大学とのかかわりを深めてもらうイベントです。

特別フォーラム 「世界の中の日本ー日本の進路ー」

安田講堂 10:30～12:00

激動する世界の中であって今後の日本の進むべき道
を、各界の識者の方々に熱く語っていただきます。

**教職員、学生の皆様も
是非ご参加ください！**

Keynote Speaker
中曽根 康弘氏



Panelists

田中 明彦氏(司会) 伊藤 元重氏
寺島 実郎氏 ロバート・A・フェルドマン氏



歓迎式典

安田講堂 12:00～13:00

- ・ 総長挨拶
- ・ 赤門学友会会長(張富士夫トヨタ自動車会長)挨拶
- ・ 近況・活動報告 他



各種イベント



サッカー祭り



キャンパスツアー



本郷いちよう藝術祭



お茶会



東大落語会 寄席



部局イベント
一般公開等

各同窓会イベント
etc...



11月15日に卒業生をお迎えしましょう！



特集

- 02 東京大学の国際化に関する意見と要望調査
(留学生・外国人学生・外国人教員・外国人研究者向け)

NEWS

一般ニュース

- 14 海洋アライアンス
海洋アライアンス、第6回国際アジア海洋地質学会議に参加
- 14 東京大学サステナブルキャンパスプロジェクト(TSCP)室
CO₂削減、待ったなし!
- 15 本部奨学厚生グループ
「東京大学光イノベーション基金奨学金」平成20年度受給者証書授与式を開催
- 15 生命科学ネットワーク
生命科学ネットワークシンポジウム2008「生命科学の広がりに向けて」開催
- 16 地球観測データ統合連携研究機構 (EDITORIA)
「データ統合・解析システム (DIAS)」を文部科学省研究開発局審議官が視察

部局ニュース

- 17 東洋文化研究所
平成20年度漢籍整理長期研修を実施
- 18 大学院人文社会系研究科・文学部
第12回東京大学文学部公開講座が開催される
- 18 大学院工学系研究科・工学部
イアエステ (IAESTE) 研修生歓迎会開催される
- 19 大学院農学生命科学研究科・農学部
大内清海氏の「米寿をお祝いする会」が開催される
- 19 大学院農学生命科学研究科・農学部
「第11回関東甲信越地区農学部附属演習林技術職員研修」を開催
- 20 医学部附属病院
医学部附属病院で大震災対応への一斉防災訓練が実施される

コラム

- 21 新連載 フロントティア生命科学 第1回
- 22 発掘! 総長室総括委員会 (第9回)
- 23 Crossroad 産学連携本部だより vol.35
- 24 インタープリターズ・バイブル vol.17
- 24 ケータイからみた東大 ~東大ナビ通信~ No.11
- 25 コミュニケーションセンターだより No.52
- 25 Relay Column「ワタシのオシゴト」 第32回
- 26 噴水 教育学部附属中等教育学校で2008年度「体験授業」行われる
- 27 噴水 教育学部附属中等教育学校1年生の富浦臨海学校が実施される

◆ 表紙写真 ◆

ベトナム国立大学より本学に寄贈された「石」を題材にした絵画
(本学創立130周年記念に際して)

編集後記

9月1日付けで採用された新人です。勉強の毎日ですが、広報グループの仕事を通して、今まで知らなかった東京大学の様々な出来事や知識が得られることを実感しています。また、つい先日、帰りの電車の中で学内広報を読んでいる方をお見かけし、自分が携わったものが、皆様に読んでいただけることは良いものだな、と実感しました。今後も多くの皆様に愛読される学内広報を目指して頑張りますので、応援よろしくお願いします。(り)

INFORMATION

シンポジウム・講演会

- 28 地球観測データ統合連携研究機構 (EDITORIA)
「データ統合・解析システム (DIAS)」平成20年度中間報告会
- 29 本部研究機構等支援グループ
学術統合化プロジェクトシンポジウム(ヒト/地球)シンポジウム「我々の未来はどのようなのか」開催のお知らせ
- 29 史料編纂所
公開研究会「歴史知識学の創成」開催のお知らせ
- 30 空間情報科学研究センター
2008年度 空間情報科学研究センター シンポジウム - CSIS DAYS 2008 - のご案内

お知らせ

- 30 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第514(10月8日)号の発行——教員による、学生のための学内新聞——
- 31 附属図書館
特別展示会「かわら版・総絵にみる江戸・明治の災害情報—石本コレクションから」の開催
- 31 本部学生支援グループ
SiLR(三四郎池のランドスケープ・リノベーション)主催の「秋の三四郎池ウィーク」が開催されます。
- 31 大学院農学生命科学研究科・農学部
第35回東京大学農学部公開セミナー
- 32 情報基盤センター
「留学生向け情報探索ガイダンス」(韓国語・中国語)のお知らせ
- 32 附属図書館
総合図書館備付け図書の推薦について(平成20年度冬学期)
- 32 情報基盤センター
「情報探索ガイダンス」各種コース実施のお知らせ
- 33 生産技術研究所
平成20年度千葉実験所公開のご案内
- 34 大学院理学系研究科・理学部
第61回小石川植物園市民セミナーのご案内
- 34 気候システム研究センター
一般公開講座2008「雲—気候を決める千両役者—」
- 35 大学院農学生命科学研究科・農学部
千葉演習林 紅葉の猪ノ川溪谷 特別ガイドのご案内
- 36 大学院理学系研究科・理学部
東大理学部で考える女子高校生の未来

事務連絡

- 37 人事異動(教員)
- 38 巻末特別記事
第7回東京大学ホームカミングデイ告知

淡青評論

- 40 国際的な大学



七徳堂鬼瓦

国際的な大学

ODA 関連の国際協力活動などにおいてアジア諸国に行くと、「東京大学ですか。アジアで一番いい大学ですね」と言われることが多い。これは、雑誌・新聞や格付け機関におけるランキングを基にした発言であると思われる。この評価の主な原動力は、国際的に影響力のある研究成果であろう。この点においては、諸先生方の活躍が素晴らしいものであると感じている。

一方で、国際交流という観点で考えると、東京大学では留学生受け入れがよく話題となる。海外の優秀な学生を、自らの教室にどう招き入れるかに躍起になっている先生方も多いが、中進国から日本への留学は、一般的には人気は低下しつつある印象である。「自分は米国に留学したかったが、米国への奨学金は競争が激しかったため、日本への奨学金で我慢した」というような意見が、アジアの中進国では頻繁に聞かれる。

この一因として、東京大学から海外施設への直接的な指導、共同研究の推進、ひいては国際貢献といった動きが不十分とは言えないだろうか。学会や誌上の場で活動することは、多国間の枠組みの中で日本のプレゼンスを示すにはよいが、より顔の見える形で強みを示すには、二国間、施設間での直接的な関わりも欠かせない。医学教育国際協力研究センターでは、アフガニスタン、インドネシア、ラオスでの ODA 案件に関わり、各国の医学教育の改善に直接的に取り組んできたが、各国からの留学受け入れも含め、先方のニーズを把握し、改革につながる介入をするためには、現地へ赴き、現場での議論が非常に重要であると、我々は実感してきた。

加我君孝前センター長は、「ハーバードやオックスフォードといった世界有数の大学は、開発途上国への協力等も惜しまずにやっている。東京大学もできないはずがない」と言っていた。これからの時代、大学の国際的な発展は、世界全体の自立発展性向上においても重要である。東京大学でも、国際貢献への取り組みが強化されていくことを切望している。

大西弘高（医学教育国際協力研究センター）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報グループを通じて行ってください。

No. 1378 2008年10月20日

東京大学広報委員会

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学本部広報グループ

TEL : 03-3811-3393

e-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

<http://www.u-tokyo.ac.jp>